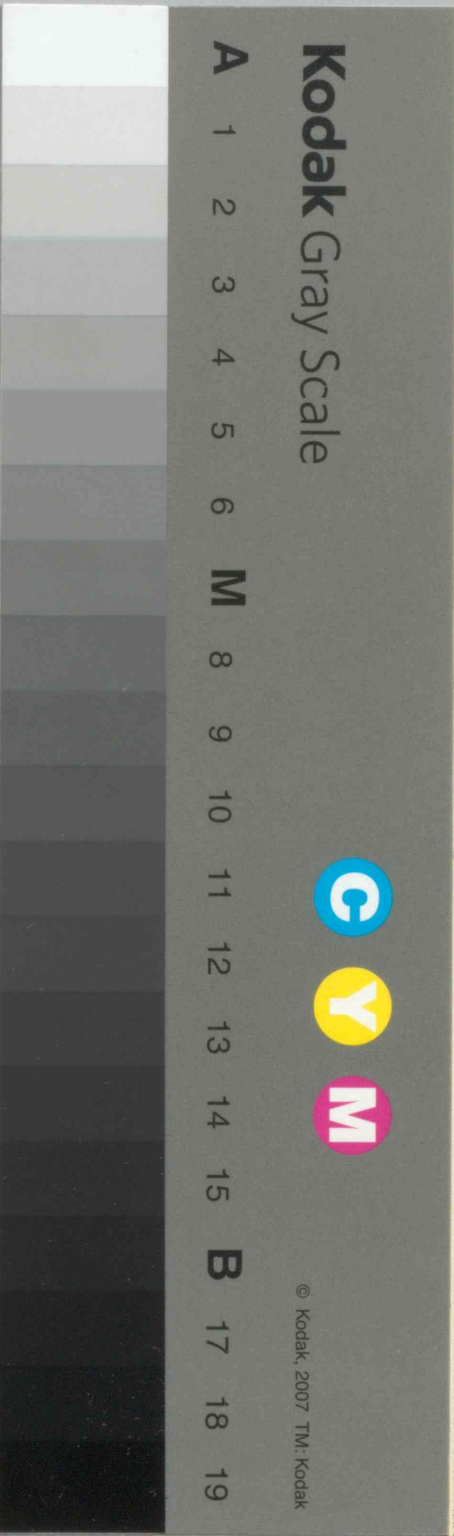
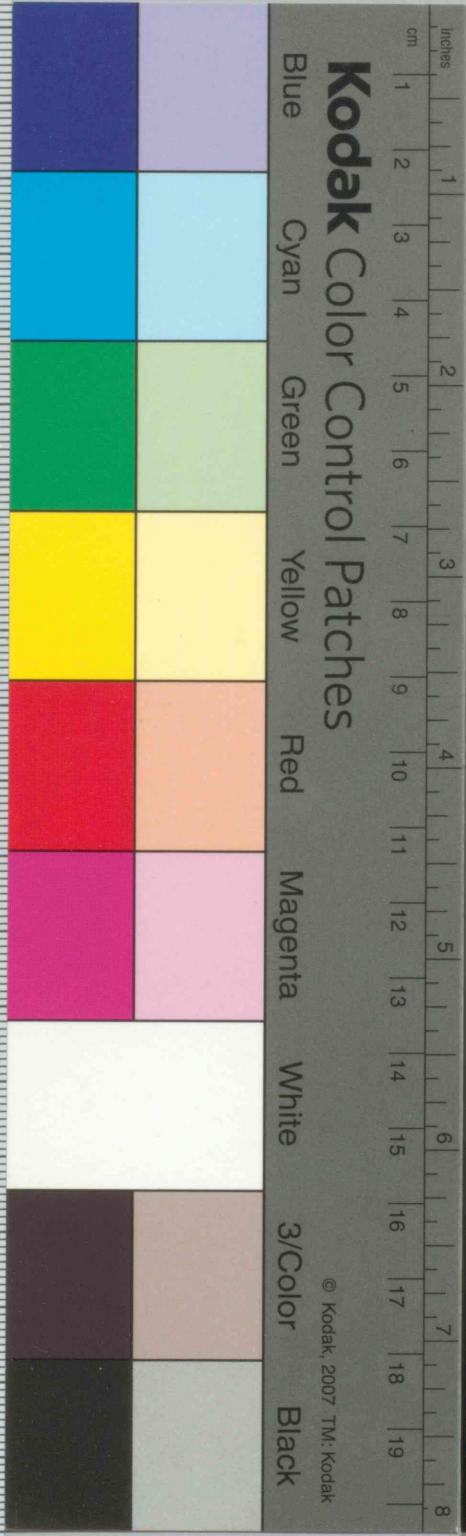
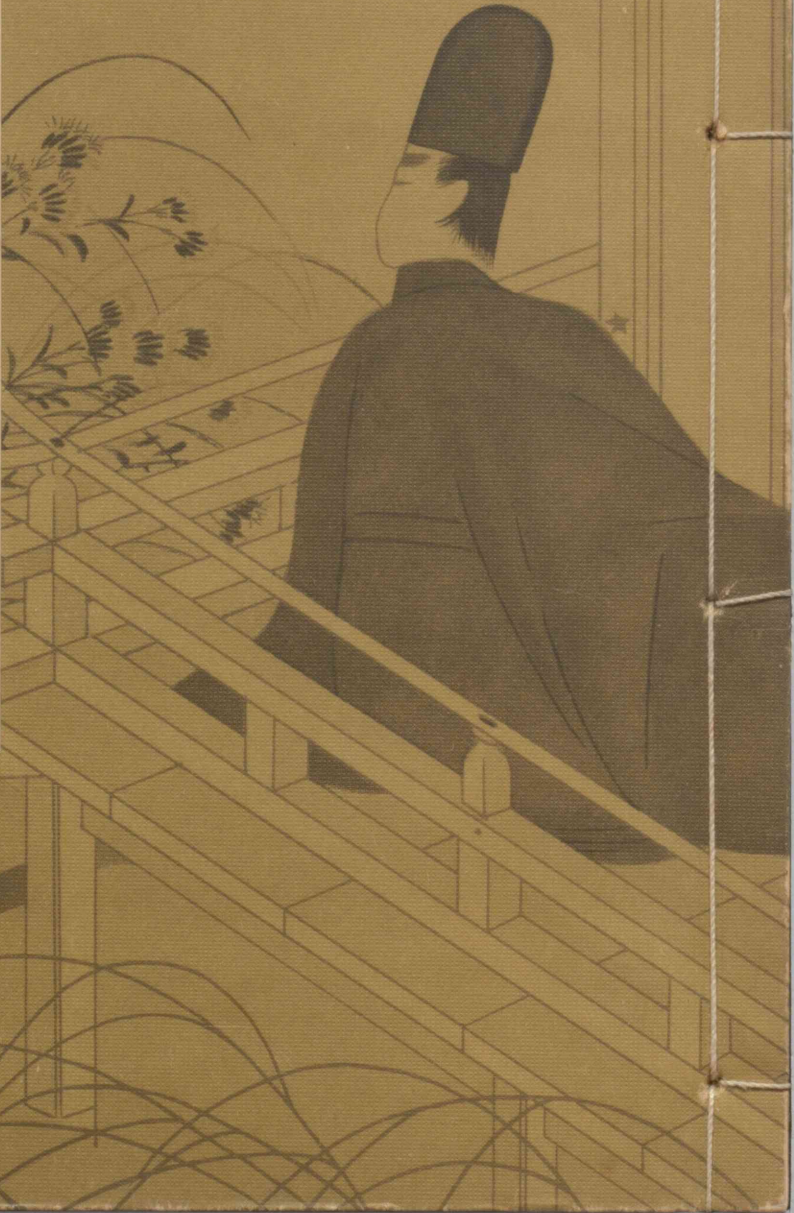


改制中等新國文卷八

375.9
Mj20
資料室



41729
教科書文庫
4
810
41-1935
01304
49254

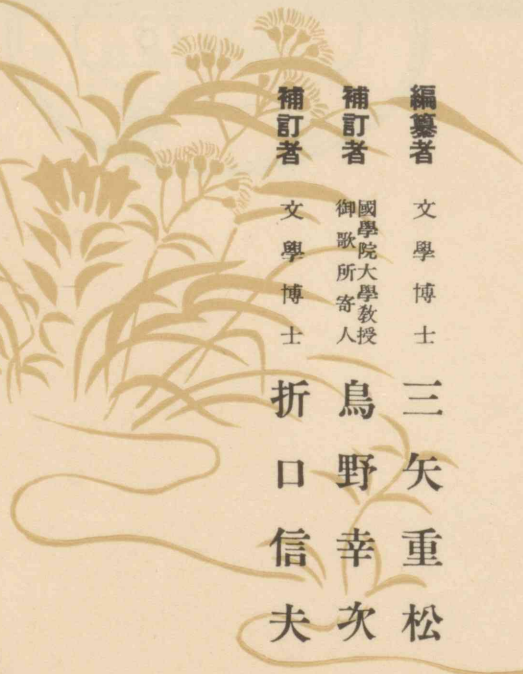


資料室

文部省檢定

中學國語教科書 實業學校國語科 昭和十年十月二十九日

改制中等新國文



編纂者	文學博士	三矢重松
補訂者	國學院大學教授	鳥野幸次
補訂者	御歌所寄人	折口信夫
補訂者	文學博士	

株式會社

文學社

375.9

Mi 20

中華圖書

広島大学図書

0130449254





〔第五課參照〕

徳川時代宿驛の圖
 (安藤重筆)

広島大学
 教
 53178
 図 書

例言

一 本讀本は、國語教育が擔へる重大なる使命に鑑み、國家的精神の昂揚と、民族の自覺の上に、大いに裨益せんとするを以て、教材選擇の主眼とす。

一 本讀本は、現代文を中心とし、各時代の各種の文體に互りてその代表的作品を網羅し、學年の程度に應じて配列を鹽梅し、以て國語常識涵養の徹底を期す。

目次 (卷八)

一 歴代天皇の御製……………佐佐木信綱……………四

二 建國歌……………北原白秋……………一四

三 知己難……………徳富蘇峰……………一八

四 忠度と俊成……………(源平盛衰記)……………三三

五 旅と宿驛……………鳥野幸次……………二七

六 熊野落……………(太平記)……………三〇

七 新島守……………(増鏡)……………三三

八 壹岐の島にて……………折口信夫……………三六

九 岡部日記……………賀茂眞淵……………三六

一〇 月は世々の形見……………室鳩巢……………三七

一一 銀河序……………松尾芭蕉……………三三

一二 義經の八艘飛び……………島津久基……………三七

一三 扇の的……………(平家物語)……………八五

一四 平家雑感……………高山樗牛……………九一

一五 方丈記抄……………鴨長明……………九九

一六 物ぐさ太郎……………(お伽草紙)……………一〇三

一七 大晦日は合はぬ算用……………井原西鶴……………一〇八

一八 新……………幸田露伴……………一三三

一九 玉勝間抄……………本居宣長……………一三六

二〇 批評論……………大西祝……………一三三

二一 梅 花……………豊島與志雄……………一三三

二二 鉢の木……………(觀世謠本)……………一四〇

二三 最明寺入道……………吉田兼好……………一六〇

二四 東郷司令長官上奏文…………………………一六四

二五 文學と氣品……………芳賀矢一……………一六九

附録 國文學の系列

一 歴代天皇の御製

佐佐木信綱

「御民われ生けるしるしあり、天地の榮ゆる時にあへらく思へば」とは萬葉集の歌で、作者は海犬養岡麿といふ一歌人であるが、この歌は、單に岡麿一人の心を歌つたものでなく、當時文物隆盛を極めた奈良朝の臣民が、前古未曾有の盛代に生まれ遭うたこの上ない喜悅の情を歌つたものである。否ひとり奈良朝の臣民の情を歌つたのみでなく、生を昭和の盛世に受けて聖天子の御治世の下に幸福を享樂してゐる我々の心事を歌つたものである。それにつけても我々が絶えず感謝し奉るのは、今上天皇を始め歴代の天皇の御盛徳である。こゝには、歴代の天皇が、その時代時代に應じて、國の爲、民の爲に大御心を盡くし給うた、その餘りになつた御

佐佐木信綱 竹柏園(ナギノソノ)と號す。明治五年三重縣に生る。文學博士。萬葉學者。歌人。御民われ云々 萬葉集卷六に見ゆ。海犬養岡麿 傳未詳。

吟詠の幾許に就いて、些か回想してみたいのである。

第一は皇祖神武天皇である。天皇は特に和歌の道に勝れさせ給ひ、賊徒討伐の軍中にお作りになつて士氣を鼓舞し給うた御製の數首は、日本書紀古事記に載つて居る。そのうち、かういふのがある。

神風の伊勢の海の 大石にやい延ひ纏ほる細螺の 細螺の 吾子よ 吾子よ 細螺のい延ひもと

神風の、の御製 日本書紀 卷三・古事記中卷に見ゆ。

これは八十梟帥を國見の丘にお撃ちになつた時の御歌である。剛健勇壯な調のうちにおのづから興國々民の元氣が横溢してゐる。

八十梟帥 大和國磯城郡に住みし穴居異民賊徒の首魁。

應神天皇には、千葉の葛野を見れば百千足る

應神天皇 第十五代。千葉の、の御製 古事記中卷に見ゆ。千葉の葛野と

家庭も見ゆ國の秀も見ゆ

の御製がある。これは單に眺望の景色を敍せられたものであるが、またそのうちに、富み榮えた民の有様を喜ばれた意を寓せられたもので、太古の治がうかゞはれる。凡の天皇は前に一言した奈良盛代を代表せられて、東大寺の大佛に千古の壯觀をとゞめ給ひし聖武天皇が、節度使の卿等に酒を賜はつた時の長歌に、

食す國の遠のみかどに 汝等がかく罷りなば 平け
く我は遊ばむ 手抱きて我はいまさむ 天皇朕が貴
の御手もて 搔き撫でぞねぎ給ふ 打ち撫でぞねぎ
給ふ 歸り來む日相飲まむ酒ぞ この豊御酒は
といふのがある。君臣悅樂せる太平の祥が溢れてゐるのを
覺える。

六 は、京都府葛野郡の地名。

聖武天皇 第四十五代。

ます國、の御製 萬葉集卷六に見ゆ。

後鳥羽天皇 第八十二代。

我が國史上に稀な悲劇の主人公におはした後鳥羽天皇は、御子の土御門順徳の兩天皇と共に、和歌の名手であらせられた。随つて數々の御製のうちには、すぐれた吟詠が多くあらせられるが、その中に、

おく山のおどろが下もふみわけて

道ある世ぞと人に知らせむ

との御製は、拜誦して涙の湧くのを覺えるのである。

や、降つて後嵯峨天皇に、

しきしまや大和島根の朝がすみ

もろこしまでも春は立つらし

の御製がある。帝王の御歌として、悠容迫らない趣がある。

元寇の際、我が國中が驚き騒いだ時、畏くも國の爲民の爲に大御心を惱ませ給ひ、伊勢大神宮に身を以てお祈りにな

おく山の、御製 新古今集卷十七に見ゆ。

後嵯峨天皇 第八十八代。

しきしまや、の御製 續後撰集卷一に見ゆ。

つた龜山上皇の御製に、

世のために身をば惜しまぬ心とも、
明らけき神の國なる食す國と

四方の海浪をさまりてのどかなる

等の御製がある。詞書には、弘安に詠ませ給ひける百首の中

に、とある。思ふに初めの二つは、元寇の來らうとする時の御

製で、最後のものは、敵の逃れ歸つた後の御製であらう。

後伏見天皇に、
民安く國をさまりて天地の

龜山上皇 第九十代。

後伏見天皇 第九十三代。

の御製がある。三・四の句に、御歌才の並々ならぬところが伺はれる。

後鳥羽上皇と御運命を同じうせさせ給ひし後醍醐天皇

も亦すぐれた御歌才であつた

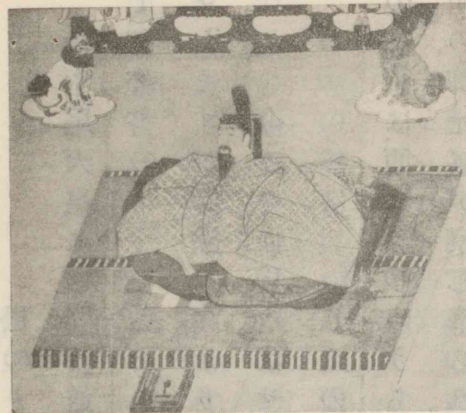
が、身にかへて思ふとだにも

知らせばや民の心のをさ

めがたさを

を拜すると、大御心の程がおしは

かられて恐れ多いことである。



皇には、

鳥の音におどろかされて曉の

後醍醐天皇 第九十六代。

挿繪 後醍醐天皇御尊像。
身にかへて、の御製 新葉集
集卷十八に見ゆ。

長慶天皇 第九十八代。

鳥の音に、の御製 新葉集
卷十七に見ゆ。

ねざめしづかに世を思ふかな
仕ふべき人や残ると山深み

松のとざしもなほぞたづねむ

後水尾天皇は學問の道に御志深く、近代の君主におはして、御著書のあつた點では順徳院にも比し奉るべき天皇にましますが、御歌も固よりすぐれていらせられた。

今こそは袋にはせめ梓弓

八つの夷もみななびき來ぬ

の御製は、簡素輕妙のうち、意氣の壯んなものがあつて、英明の御元氣が察し奉られる。
靈元天皇も亦御名吟が多くおはした。左の如きはそれを代表するものである。

名あるものはやがて雲居にきこえ上げよ

後水尾天皇 第百八代。

靈元天皇 第百十二代。

聞きて我が世のたのしびにせむ

へだてなき我が日本の光をば

あだし國まであふがざらめや

あふぐかな神の御代より世々絶えず

しるせる國の史のかしこさ

これ等の御製は、何れも眞淵・宣長等、近世皇國學者の愛國的歌の始めをなされて居る。

最後に、幕末騷擾の時代に明治維新の基を建て給うた孝

明天皇には、

ものふも心あはせて秋津洲の

國はうごかずともに治めむ

戈とりて守れ宮人九重の

みはしの櫻かぜさわぐなり

眞淵・宣長 賀茂眞淵、本居宣長。國學四大人の一。

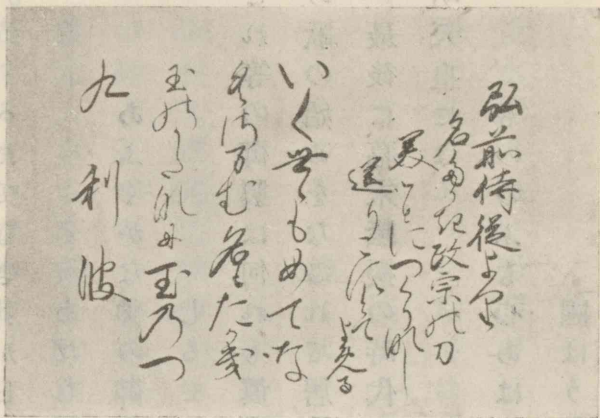
孝明天皇 第百二十一代。

この國は日の本なれば日かげより
花うぐひすの春ぞ見えゆく

等の感慨深い御製がある。

以上、歴代の天皇の御製を誦し奉るに、何れも或は平和の時に際し、或は亂世に當つて、民をいつくしみ國を憂へ給ふ大御心の送り出たもので、我々臣民をして聖旨の有難さに感激せしめるものがある。

戴き下にはこれに應へまつる忠良の臣民を以てした我が



上にはこの聖天子の相繼ぎ相承け給うた連綿たる皇室を

挿繪 孝明天皇御宸筆。

弘前侍従より名たかき政宗の刀美ことにつくりなし送りこすとてよめる
いく世々もめてなくさまむ名もたかき玉のかたなに玉のつくりは

國が、世界無比の皇統を形成し來つて今に至つた次第は、ここに我々の爲に明かなものがあると思ふ。

―(和歌百話)―

○天津日の影

幾度もくりかへしつゝ大君のみことしよめば
涙こぼるゝ (久阪 通武)

浮雲のおほふ姿はかはれども萬代同じ
天津日の影 (頼三樹三郎)

君が代を思ふ心のひとすぢに我身ありとは
おもはざりけり (梅田 雲濱)

大君の爲には何か惜しからむ薩摩の瀬戸に
身は沈むとも (釋 月 照)

梓弓眞弓槻弓さはにあれどこの筒弓取
しくものあらめや (佐久間 象山)

久阪通武 玄瑞と稱す。長州の醫。勤王家。元治元年歿、年二十六。
頼三樹三郎以下は一七三頁参照。

二 建國歌

北原 白秋

北原白秋 名は隆吉。明治十八年福岡縣に生る。詩人。

そのかみ、天つち開けし始め、
げに萌えあがる葦禾なして、
立たしし神こそ
國の常立。

國の常立 國常立の神。神代七世の一神。

いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
かの若々し神の業を。

惟ふに、日靈の大御神の、

日靈の大御神 大日靈貴神 (オホヒルメムチノカミ)。天照大神のことを申す。

げに言因し給へる御詔、

知らせよ、皇孫、

三つの寶と。

いざ、

いざ仰げ、起ち復り、

豊葦原の中つ國を、

神武の御代こそ荒ぶる和し、

げに現つ神宮太敷きて、

初めて築かせし、

國の礎。

いざ、

いざ仰げ、起ち復り、

神ながらなる崇き道を、

爾にぞ、明治の大き帝、

げに晴れわたる青高空と、

更にし昭らさす、

四方に八隅に、

いざ、の寶を、

いざ仰げ、起ち復り、

わが彌榮の日いづる國を、

依り會ふ天地きはみ知らず、
げに天皇の御稜威盡きず、
誇れよ、國民、

われら榮あり、

いざ、

いざ仰げ、起ち復り、
たゞひたむきの日本魂を、

（國民歌謠集）

三 知己難

德 富 蘇 峯

朋友にして知己ならざるものあり。知己にして朋友ならざるものあり。否、知己は敵人にもこれあるべし。かの仲達が祁山・渭水の空營を按じて、天下の奇才なり。と絶叫したるを見れば、いかに彼が孔明の知己たりしやを知るべし。孔明は實に二箇の知己をもてり。敵にては司馬仲達、身方にては劉玄德。

人は何人とも朋友となるを得べし。情と情と相接する日は、即ち朋友の出で来る時なり。觸るれば情を生じ、着すれば情を生じ、久しければ情を生じ、しばらくすれば情を生じ、竹馬の友・同窓の友・同郷の友・同位置の友・同臭味の友、友もまた類多し。然り、天下何人か友ならざるものあらん。少しく心を

德富蘇峯 名は猪一郎。文久三年、熊本縣に生る。思想評論家。貴族院議員。

仲達 魏の名將司馬懿の字。

祁山・渭水 共に支那甘肅省鞏昌府にあり。

孔明 蜀の丞相諸葛亮の字。

玄德 蜀の昭烈帝劉備の字。

とめて談話すれば、東京より横濱に至るまでの汽車中にてすら、幾多の友人は得らるゝにあらずや。

知己に至りては然らず。天下千百の朋友を得るは容易なり。而して一人の知己を得るは難し。知己とは何ぞ。我よりすれば彼に知らるゝなり。彼よりすれば我を知るなり。

君ならでたれにか見せん梅の花

色をも香をも知る人ぞ知る(紀友則)

これ實に知己に對する情なり。知己實に難し。故に一の知己を得れば、殆ど一の生命を得たるよりも嬉しく、一の知己を失へば、一の生命を失ひしよりも悲し。鍾子期死して伯牙絃を絶ち、荆軻死して高漸離また筑を撃たず。その心まことに憐むべきものあり。楊巨源の詩にいはいはく、

詩家清景在新春。柳嫩鶯黃色未勻。

君ならで云々 古今集卷一に出づ。

鍾子期・伯牙 共に支那戰國時代初期の音樂家。

荆軻・高漸離 共に戰國時代末期の人。荆は志士、高は樂工。

筑 琴に類したる樂器。楊巨源 中唐の詩人。

若待^レ上^レ林^ニ花^ニ似^ル錦^ニ 出^ル門^ニ皆^シ是^レ看^ル花^人

と。龍を見て龍となす、難きにあらず。一寸の蛇を見て、早くも、その雲を起し霧を吐き、茫洋として、玄間を窮め、日月に薄るを知る、これ難きなり。知己の難きは、そのいまだ發達せざる時において、他日の發達を卜するにあり。その見れたる嘻笑、怒罵の外に、隠れたる胸間の神祕を會得することの難きにあり。人はその半身上は祕密なり。知己はよく鍵なくして、この祕密を知る。もとより他の我に語るを待たざるなり。語るを待ちてこれを知る、これ豈知己ならんや。

かくて、知己の感はまた兄弟の間にもあり。東坡かつて獄に投ぜられて、重辟に處せられんとするを聞き、その弟子由に書を贈りていはく、

是處青山可埋骨、 他年夜雨獨傷神。

與君世々爲兄弟、 又結來生未了因。

と。その同胞の情もとより篤し。況や、これに重ねるに、雙々、知己の恩愛をもつてするにおいてをや。死後なほ兄弟となり、その未了因を繋がんといふ。世の兄弟にして、かくの如き知己の感あるもの古往今來、それいくばくぞ。

知己は、敵人にあるのみならず、生面の人にもあり。或は古人に對してもあり。知己の交感は時を問はず、所を論ぜず。賈生が屈原を慕ひ、孟軻が孔子を慕ひ、而して孔子が周公を慕ひて、「我また夢に周公を見ず。」といひしが如き、何ぞその言の懇到深切なるや。キケロいはく、「余に對しては、スキピオなほ生くるなり。しかして常に生くべし。」と。嗚呼、宇宙茫々、たゞ知己ありてもつて繋ぐところあり。知己なくば人生は荒野のみ、荆棘のみ。

茫洋として云々 韓愈の文に「龍乘^レ此氣^ニ茫洋^{トシテ}窮^ル乎^ニ玄間^ニ薄^ル日月^ニ。」雜説と。

東坡 宋の文豪蘇軾の號。英宗・神宗に歷事し、翰林學士兼侍講に至る。子由 東坡の弟蘇轍の字。同じく文學者。

是處云々 この詩は七言律

詩にて、こゝにはその後半を擧ぐ。

賈生 名は誼。前漢の詩人。その作「弔屈原賦」は有名。
屈原 名は平。戰國時代の楚の文章家。
周公 名は旦。周の武王の弟。政治家。
キケロ Cicero. ローマの雄辯家。政治家。
スキピオ Scipio. ローマの名將。

人は知己のために、その憂苦患難を共にするを厭はず。甚だしきは、その一身を投じて知己のために犠牲となるものあり。彼等は漫りに犠牲となるにあらず、實に知己のために犠牲となるなり。苟も一の知己を得る、生命を捨つるも悔いず。況や區々たる浮世の名利をや。魏徵が「人生感意氣、功名誰復論」の句、實に人の深奥なる思想を吐露したるものにあらずや。

人生の最も清福なるは知己を有するにあり。朋友中、知己を有するは、最も清福なり。而してその兄弟姉妹・父母の中に知己を有するは、最も大いなる清福なり。かの東坡子由の如く、風雨の夜、兄弟床をならべて、千古の懷を敘するを得ば、天下またこれに優る清福あらんや。
——静思餘録——

魏徵 唐の名臣。高祖及び太宗に仕へ、大才にして偉略ありき。
人生感意氣云々 魏徵が「述懐」の詩の末句。

四 忠度と俊成

薩摩守忠度と申すは入道の舍弟なり。淀の河尻まで下りたりけるが、郎等六騎相具して、忍びて都へ歸り上る。如法夜半の事なるに、五條三位俊成卿の宿所に行きて門を敲く。内にはこれを聞きけれども、かゝる亂の世なる上、いぶせき夜半の事なれば、敲けども敲けども開かざりけり。あまりに強く敲きければ、やゝ久しくありて青侍を出し、戸を開かせてこれを問ふ。忠度と申す者、見參に申し入れたき事ありて参りたり。と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細目に開きて對面あり。
忠度宣ひけるは、「かゝる身として御ため憚あれども、所詮一門榮花盡きて都に安堵せず、西海へ落ち下り侍り、亡びん

忠度 平清盛の弟。壽永三年（八四一）の谷にて戦死す。年四十一。
入道 平清盛。

五條三位俊成 歌人。藤原氏。元久元年（二六四）薨。年九十一。

こと疑なし。世静まりて後、定めて救撰の沙汰候はんか。縦ひ身は八重の潮路の底に沈むとも、藻鹽草書きおく末の言の葉、後の世までも朽ちぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ出し



て、河尻より忍び上つて侍り。これぞ年比讀み集めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に波の下にみく

づとなさんこと遺恨に侍り。これを砌下に參らせ置き候ふ。救撰の時は必ず思し召し出せよ」とて、卷物一卷泣く泣く鎧の引合せより取り出したり。三位感涙を流し、これを請け取り、「御詠一卷預りおき候ひ畢んぬ。これ永代秀逸の御形見、未

挿繪 忠度、俊成を訪ふ圖。尾形月三筆。

來歌仙の指南のためか。この忽劇の中に御音信に預ること、恐悦少なからず候ふ。縦ひ浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、救撰の時は思ひ出し侍るべし。」と宣へば、忠度今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも思ふ事なしとて馬に乗り、古詩を、
前途程遠、馳思於鴈山之暮雲。
後會期無、霑纓於鴻臚之曉淚。
と打ち上げ打ち上げ詠じつゝ、南を指してぞ落ち行きける。本文には、後會期遙と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限の別れなりと思ひければ、後會期無と詠じけるこそ哀なれ。三位も名殘の惜しくして、遙かにこれを見送りても、あはれ世に存りしには、この人どもにこそ諂ひ追從せしに、變る習とて、今は門を隔つる事の悲しさよと、哀なるにも

前途程遠云々 大江朝綱が渤海の使者に贈れる詩句。(和漢朗詠集)

涙優なるにも涙忍の袖をぞ絞られける。
代静まりて後千載集を撰ばれけるに、忠度この道を嗜み、
河尻より上りたりし志を思ひ出し給ひて、故郷の花といふ
題に「讀人しらず」とて一首入れられたり。

千載集 二十卷。敕撰和歌集。文治三年九月成る。

志賀の都 滋賀縣滋賀郡に

ありし天智天皇の大津宮。
ながらの山 滋賀縣滋賀郡。

とよめる歌なり。名字をも顯し、あまたも入れまほしかりけれども、朝敵となれる人のわざなれば、憚り給ひて、只一首ぞ入れられける。亡魂いかに嬉しく思ひけん、哀にやさしくぞ聞えし。

源平盛衰記 四十八卷。二條天皇の應保年間より安徳天皇の壽永年間に至る約二十年間の源平二氏盛衰の諸事件を記せるもの。作者不詳。

五 旅と宿驛

鳥野 幸次

鳥野幸次 明治六年、福井市に生る。宮内省御歌所寄人。國學院大學教授。

富士燕の超特急で東海道六百軒の道を八時間で走らせ、
鳥より疾い飛行機で自由に天空を飛翔する如きは、古昔と言はず、私たちが幼時にさへ夢想だもしなかつた事であるが、それと同時に、長汀曲浦の旅の道に、馬を馳らせては雞聲を逐ひ、山館野亭の夜の宿に、日を重ねては吟腸を絞る往古の旅が、いかなるものであつたかも、また今の人にはちよつと想像のつかぬ事であらう。

いづくにか我は宿らん高島の
勝野の原にこの日くれなば(高市黒人)

大和こひいの寝らえぬに心なく
この洲の崎にたづ鳴くべしや(忍坂部乙麿)

大和こひ云々 萬葉集卷一に出づ。

いづくにか云々 萬葉集卷三に出づ。

時には旅情と郷愁とで遣る瀬なさの極みに立つ事もあらうが、

伊勢の海の沖つ白波花にもが

をぐる崎みつの小島の人ならば

都のつとにいざといはましを

の如き大自然が到る所に展開して、旅人の心を極度に引き

つける。

雞聲茅店の月 人跡板橋の霜(温庭筠)

この朝立ちのすがしさを味はふ旅人はまた、

歌知らぬ旅人はなし春の風(大島蓼太)

で長閑な春風の前には、悉く歌人となつて街道を練る。この

快い美しい印象は、何時までも詩篇となり、繪巻となつて、そ

伊勢の海の云々 萬葉集卷三に出づ。

をぐる崎云々 古今集卷二十の東歌。

雞聲茅店 温庭筠(唐代の詩人)の「商山早起」の詩の句。

大島蓼太の「春の風」の詩の句。

の人々の脳底にとゞまる。其所には旅の苦しみなどあつたものではない。これを思ふ時、昔の旅の懐かしさに、せめて五

十三次だけでも歩いて見

たいといふ氣になるのが

常でもとは私たち同人の

間の話題にも上つたもの

である。

所で、この旅行に最も重

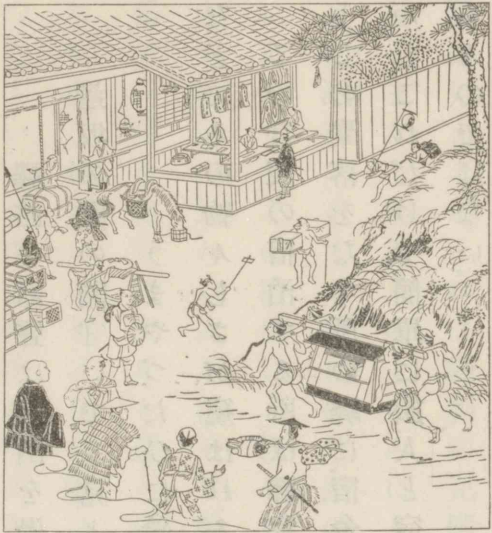
要な關係を有するものは

宿舎である。令の制度では、

三十里に一驛を置く事になつて居り、尙地形の便否によつ

て、この里程の伸縮はあつたにしても、大體は動かぬもので

あつた様だ。そして驛には驛長があり、驛子があり、驛馬を具



挿繪 徳川時代の宿驛の圖。

令 大寶令のこと。文武天皇の大寶元年(三六)に發布。

備して官使の乗用に充てる。その使の驗に賜はつて携へるの
のが、いはゆる驛路の鈴で、

漁舟の火影は寒くして波を焼き、

驛路の鈴聲は夜山を過ぐ(杜荀鶴)

逢坂の關の關守いでて見よ

うまやづたひに鈴聞ゆなり(天江匡房)

などで、その物々しさが窺はれる。

この官使の宿泊する所は驛家であり、普通の旅人もやはりこの聚落をなす所の驛に、宿舎を求めたものであらう。しかし、これだけで、簡単に旅人と宿舎との關係は語り盡くせるものではない。

吾が背子はかりほつくらすかやなくば

小松がしたの草を刈らさね

驛路の鈴



漁舟の云々 杜荀鶴(唐代の詩人)の「秋夜臨江驛に宿る」の詩句なるも、和漢朗詠集に出づ。
逢坂の關云々 堀川百首に「關」と題して出づ。

吾が背子は云々 萬葉集卷一に見ゆ。

は、中皇女命が紀伊の温泉にいでました時の御歌で、その御旅行の先々に假屋の出來た様が窺はれる。他にもこの類の歌は見えるが、これは驛制の完備しない上代のみのも事でもなく、また王侯貴人の上のみにも限らない。更科日記の作者が、初瀬詣でをする時には、往路の一夜を贄野の池のあたりにあかした。その宿はいと怪しげなげすの小家であつたが、主人は氣の知れぬ人を泊めて、釜ばしぬかれてはと、寝ずの番で一行を見守つたかと思へば、歸途に泊つた奈良坂のこなたの、これもいみじげな小家は、前と反對に、盗人の家であつたといふ、さてまた次の度の參詣には、類廣うて小家などに宿泊も出來ぬので、野中にかりそめの宿を作つて作者を据ゑ、從者たちは野宿をしたので、
草の上に行簾などを打ち敷きて、上に蓆を敷きて、いとほ

中皇女命 孝徳天皇の身

紀伊の温泉 和歌山縣西牟婁郡の湯崎温泉。古くむろのいてゆ」といふ。

更科日記 一卷。菅原孝標の女の著。作者の自叙傳ともいふべきもので、十三歳より五十歳までの生活の記録。

初瀬詣で 大和國(奈良縣)磯城郡長谷寺の觀音に參詣すること。
贄野の池 今の京都府(山城國)綴喜郡多賀村附近の地藏池をいふか。
奈良坂 奈良市の北方の坂。

かなくて夜をあかす。頭もしとゞに露おく。曉方の月いと
いみじく澄みわたりて、よに知らずをかし。

と、いかにも面白さうに書いてはゐるが、當座の難儀は容易
ならぬ事であつたらう。これは寧ろ驛制の廢れた平安末の
事で、受領階級の子女たちの近畿地方に於ける旅行の種々
相を、最もよく知り得ると共に、廣く他を類推する事も出來
旅の冠辭に「草枕」と措いた上代人の思想の、どこまでも續い
た事が知られるのである。

また尙古昔の旅行に伴ふ大きな不便と恐怖とは、糧食の
携帯であり、盜賊の横行であつた。伊勢物語に「皆人かれいひ
の上に涙落してほとびにけり」と書いた「かれいひ」は、乾飯で
あり、糲である。そして旅に糲を携へるのは、業平東下りの昔
に限つた事ではない。柳菴雜筆に據れば、

柳菴雜筆 栗原信充（幕末

慶長頃の旅人、糲二合五勺を一日に充て、十日路を行くに
二升五合をもたらし、驛舎に着きて湯をわかし、糲を食ひ
て寝るまでなりし。されば湯の木の代四錢五錢を拂ひ、往
來せしとなり。

と見え、これが宿に「木錢」といひ「木賃」といふ事の出所である。
盜賊に縁のある話は前にも書いたが、これは直ちに生命
にも關する問題であるから、豫め出來るだけの防備をして
置くのが、旅人の常であつた。萬葉集に見える 間人宿禰大浦
の

天の原ふりさけ見れば白眞弓

はりてかけたり夜路はよけん
の歌が「白眞弓を張りて天に懸けつれば、山賊などの恐れな
くして、今行く夜路はあしからじとなるべし。」と言つた契沖

の幕臣)の著。四卷。考
證を主としたる雜記。

間人宿禰大浦 傳未詳。

天の原の歌 萬葉集卷三に
見ゆ。

白眞弓 萬葉集代匠記卷三
に出づ。

契沖 大阪に住す。萬葉集

説の當否は暫く別問題として、旅人が弓矢で護られた事は源氏物語の玉葛たまかつらが初瀬參詣をする時に、その頼もし人なる豊後介が弓矢持った人を二人召し具した事でもわかり、更科日記に、

紫生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓も
たる末見えぬまで、高く生ひ茂りて、中を分け行くに、竹芝
といふ寺あり。

と書いてあるのは、長途をかくる國司一族の上洛であるから、その行粧の嚴かな様も目に見える様である。

その物の本質の上から國訓に「うまや」と訓まれた驛は、何時しか「やどり」の義のある宿とも稱せられ、續いて宿驛ともいふ様になつた。「やどり」をも兼ねた上代の「うまや」は段々「うまや」の實を失つて、「やどり」を主とするに至つた。茲に名稱の

の研究事業を開拓したる學僧。元祿十四年(三六〇)歿、年六十二。
源氏物語云々、源氏物語、玉葛の巻に見ゆ。

竹芝といふ寺 今の東京市芝區三田臺町にある濟海寺がその跡といふ。

變化が生ずる。けれども旅行に付き物の人足や馬の次ぎかへが、この宿より外には、求めらるべくもない。其所に宿次しゆくじの語が生れ、略しては次とも言はれた。そしてこの宿なり次なりが、形は變つても、永久にまた「うまや」の實を傳へる事となつた。

徳川の太平三百年、參勤交代の大小諸侯が、金紋先箱や鳥毛の槍を立てての上り下りが、いかに美しいものであつたかは、想像以上であり、士庶人の來往もまた絡繹として、櫛の齒を挽く如くであつたらう。随つて驛路の整頓と、宿舍の完備と、前代に比しては、殆ど隔世の感があつたらう。そしてこの時代に於ける驛路なり宿舍なりの最も代表的なのが、東海道とうかいどうの五十三次で、その面影は、一九の膝栗毛や廣重の繪で窺知する事が出来る。けれども上代以來旅に附隨した不便

一九 十返舎一九。本名は重田貞一。江戸時代の戯作者。天保二年(西九)歿、年六十七。

膝栗毛 東海道中膝栗毛。廣重 歌川廣重。安藤氏。江戸時代の浮世畫師。特に風景畫に長ず。その「東海道五十三次の繪」は最も著名なり。安政五年(三五)歿、年六十二。

と脅威とが、これで全然無くなつたわけではないので、行く者は水杯をして別れ、残る者は蔭膳を据ゑて、その平安を祈つたなども、維新前までは残存した風俗である。しかしながら、世の開化に趣くと共に、交通の整備と迅速とは人の豫想を超越して、驚くばかり進歩した。そして上代以來の様々な旅の風俗習慣などは、今は懐かしい昔話として残るのみである。

草臥れて馬に乗るは大なる損なり。馬にも駕にも朝のうち乗るべし。朝は價も安し晝より後泊りの驛程近ければ、足のはこびもおのづからはかどりてすゝむものなり。しかれども朝のうち足をやすませおかげれば、草臥格別にしてよく日もの用にたちがたし。出立より五六日めにしてはじめてあしのさだまるものぞかし。

(瀧澤馬琴)

瀧澤馬琴 江戸時代の戯作者。嘉永元年(二五〇八)歿、年八十二。

六 熊野落

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されむ爲に、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城已に落ちて、主上囚はれさせたまひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐れ御身の上に迫りて、天地廣しといへども御身を隠さるべき所なく、日月明かなりといへども長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて露に臥す鶉の牀に御涙を争ひ、夜は孤村の辻に佇みて人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、いづくとても御心安かるべきところなかりければ、かくても暫しはおぼしめされけるところに、一乘院の候人按察法眼好專如何して聞きたりけむ、五百騎を率ゐて未明に般若寺へぞ寄せたりける。

大塔宮

後醍醐天皇の第三皇子護良親王。延暦寺の大塔に居給ひし故に大塔宮と申す。建武二年(元九五)足利直義の爲に弑せらる。御年二十八。

笠置

山城國(京都府)相樂郡笠置村(木津川の南岸)にある山の名。山上の古寺を笠置寺といふ。後醍醐天皇の行在所たりし所。

南都

奈良。

般若寺

律宗。奈良市奈良坂の南にあり。

笠置の城落ちて云々

元弘元年(一九)九月二十八日のこと。

主上

後醍醐天皇。第九十六代。

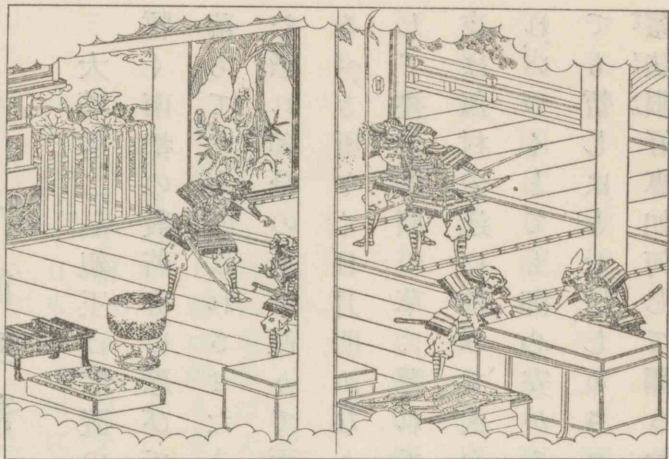
虎の尾を云々

書經に「心之憂危若踏虎尾涉于春水」と。

一乘院

奈良興福寺の末寺

折節宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防



置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃は未だ蓋をあけ

ぎて落ちさせたまふべき様もなかりける上、透間もなく兵已に寺内に打ち入りたれば、紛れて御出であるべき方もなし。さらばよし、自害せむ。と思しめし、既におしはだ脱がせたまひけるが、事叶はざらむ期に臨んで、腹を切らむ事はいと易かるべし。若しや」と、隠れて見ばや。とおぼしめし返して、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて

の一。同寺の北にありき。候人。門跡家に使はるる家臣。一條院は興福寺の寺務門跡なりき。

挿繪 大塔宮危難の圖(太平記圖會)

大般若 大般若經。六百卷。唐の玄奘三藏の譯。

ず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取り出して蓋をもせざりけり。この蓋を明けたる櫃の中へ御身を縮めて臥させたまひ、その上に御經をひきかづきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されなば、やがて突き立てむと思し召して、氷の如くなる刃を抜いて御腹にさし當て、兵、ここにこそ。といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、おし量るも尙淺かるべし。

さるほどに兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも残る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ。とて、蓋したる櫃二つを開けて御經を取り出し、底を翻して見けれどもおはせず。蓋開けたる櫃は見るまでもなし。とて、兵皆寺中をいで去りぬ。宮は不思議の御命を續がせ給ひ、夢に道行く心地し

て櫃の中におはしけるが、若しまた兵立ち歸り委しく搜す事もやあらむと御思案ありて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせたまひてぞおはしける。

案の如く、兵どもまた佛殿に立ち歸り、前の蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なし。とて、御經を皆打ち移して見けるが、から／＼と打ち笑うて、大般若の櫃の中をよく／＼搜したれば、大塔宮はいらせ給はで大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。と戯れければ、兵皆一同にわらひて門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なり。と、信心肝に銘じ、感涙御袖を沾せり。

かくて南都邊の御隠れがも叶ひ難ければ、即ち般若寺を御出であつて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林坊玄尊、赤松律師、則祐、木寺相模、岡本三河坊、武藏坊、村

上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼是以上九人なり。宮を始め奉つて御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

この君固より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて叶はせ給はじと、御供の人々かねて心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮脚半草鞋をめして、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、懈らせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も、勤修を積める先達も、見尤むることなかりけり。

由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ舟の楫をたえ、浦の濱ゆふ幾

玄奘三藏 支那唐代の高僧。洛陽河南の人。十三年を費して印度に佛經を求め、歸唐後、太宗の勅によりて譯す。大般若經これなり。

摩利支天 佛敎では帝釋天の眷屬とし、印度神話では火星の神とす。俗に軍神とし、また隱形の神とす。

十六善神 佛法守護の神。熊野 紀伊國(和歌山縣)牟婁郡をひろく熊野といふ。

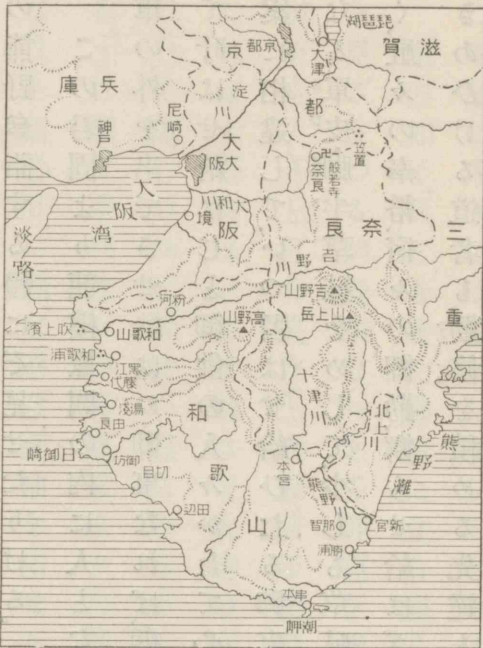
赤松律師 則村の第三子。延暦寺の律師。初め護良親王に従ひ、後、尊氏に従ふ。

村上彦四郎 義光。信濃國の人。元弘三年、吉野城の陥らんとする時、大塔宮の身代りとなる。柿の衣 赤色で無紋の衣。頭巾

山伏



由良の湊 紀伊國日高郡にもあるがこゝは、淡路國(兵庫縣)津名郡。和歌山對岸の港。



子に着き給ふ。

その夜は叢祠の露に御袖を片敷いて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらむと、神

重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、薄紫や藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月にみがける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨をふくめる孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王

濱ゆふ



藤代 紀伊國海草郡。同國和歌山市和歌浦。吹上 同國海草郡。和歌山市の西南部から雜賀村に至るまでの古名。挿繪 熊野地方要圖。玉津島 同國同郡。その海岸に玉津島神社あり。雨をふくめる云々 唐の盧綸の詩句に「孤村樹色昏、殘雨、遠寺鐘聲送夕陽」と。切目の王子 切目の王子社。今、切目神社（熊野大社の末社）。紀伊國日高郡にあり。

びんづら



熊野三山 紀伊國東牟婁郡の本宮・新宮・那智の三社。

慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御臑を曲げて枕として、しばらく御まどろみありける御夢に鬢結うたる童子一人来て、「熊野三山の間は尙も人の心不和にして、大義成り難し。これより十津川の方へ御渡り候ひて時の至らむを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附け進らせられて候へば、御道指南仕るべく候」と申すと、御覽せられて、御夢はすなはち覺めにけり。これ權現の御告げなりけりと頼もしくおぼしめされければ、未明に御喜びの奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねてぞ分け入らせ給ひける。その道のほど三十里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峰の雲に枕を欹てて苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍んで朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁、劔に削

十津川 大和國吉野郡の川。熊野川の上流。兩所權現 本宮と新宮を指す。伊弉諾・伊弉冉二尊の權現といふ。山路もとより云々 唐の王维の詩句に「山路元無雨。空翠濕人衣」と。見上ぐれば云々 遊仙窟に「向上、則有青壁萬尋、直下、則有碧潭千仞」と。

り、見下せば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を
經させたまへば、御身も草臥れ果てて流るゝ汗水の如く、御
足缺け損じて草鞋皆血に染まれり。御供の人々もその身鐵
石にあらざれば、皆々うゑ疲れてはかゝしくも歩み得ざ
りけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に十
津川へぞ着かせ給ひける。

〔太平記〕

鎌倉弔古

東海老鯨波底斃

南山白虎土中昏

當年想見噬刀恨

碧草無邊舊血痕

(長谷川昆溪)

太平記 四十卷。別に劍卷
一卷。文保二年、後醍醐
天皇の御即位より、後村
上天皇の正平二十二年に
至る五十餘年間の戦亂に
關する事件を記す。作者
不詳。

東海ノ老鯨 北條高時を指
す。

南山白虎 大塔宮を指す。

長谷川昆溪 名は城。江戸
の人。詩人。歿年不詳。

七 新島守

承久三年四月二十日、帝おりさせ給ひ、春宮四つにならせ
給ふに譲り申させ給ふ。近頃皆この御齡にて受禪ありつれ
ば、これもめでたき御行末ならむかし。同じき二十三日、院號
の定めありて、今おりさせ給へるを、新院と聞ゆれば、御兄の
院をば中院と申し、父皇をば本院とぞ聞えさする。この程は
家實の大臣關白にておはしつれど、御讓位の時、左大臣道家
の大臣攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。
さても院のおぼし構ふること、忍ぶとすれどやうく漏
れ聞えて、東さまにもその心遣ひすべかめり。あづまの代官
にて、伊賀の判官光季といふ者あり。かつく彼を御勸じの
由仰せられければ、身方に參るつは者ども押寄せたるに、遁

承久三年 紀元一八八一年
帝 順德天皇。

春宮 仲恭天皇。

御兄の院 土御門上皇。

父皇 後鳥羽上皇。

家實 近衛基通の子。攝政

關白となり、三宮に准ぜ

らる。仁治三年薨す、年

六十四。

(一八三九—一九〇二)

道家 藤原真經の子。攝政

關白となる。建長四年薨

す、年六十。

(一八五三—一九二二)

あづまの若君 藤原頼經。

當時征夷大將軍として鎌

倉に在り。

院 後鳥羽上皇。

あづまの代官 京都守護。

るべきやうなくて、腹切りてけり。先づいとめでたしとぞ院
は思しめしける。



といふ一男と、二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都
にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、おのれをこのたび都
にまゐらすことは、思ふ所多し。本意の如く清き死にをす

あづまにもいみじうあわて騒ぐ。さるべくて身の失すべ
き時にこそあなれと思ふもの
から、討手の攻めきたりなむ時
には、かなきさまにて屍を曝さ
じ。おほやけと聞ゆとも、みづか
らし給ふことならねば、かつは
わが身の宿世をも見るばかり
と思ひなりて、弟の時房と、泰時

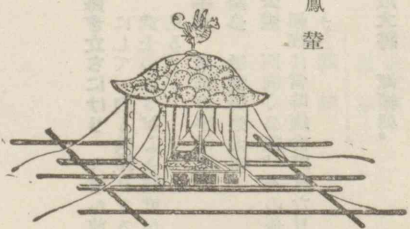
挿繪 後鳥羽天皇御尊影。

わが身 北條義時。

時房 北條義時の弟。承久
の役後、六波羅を鎮し、
伊勢守護を兼ね。義時の
卒後、執權連署となり、
修理大夫に任ず。仁治元
年（一九〇〇）歿す。
泰時 義時の長子。北條氏
三代の執權。三善康運と
貞永式目を制定す。仁治
三年歿、年六十。
（一八四三—一九〇二）

べし。人にうしろを見えなむには、親の顔また見るべからず。
今を限りと思へ。賤しけれども義時、君の御爲にうしろめた
き心やはある。されば横ざまの死にをせむことはあるべか
らず。心を猛く思へ。おのれ打勝つものならば、二たびこの足
柄箱根山は越ゆべし。など泣く／＼いひ聞かす。誠にしかな
り、また親の顔拜まむこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の
袖を絞る。かたみに今や限りと哀に心細げなり。
かくて打出でぬる又の日、思ひかけぬ程に、泰時只ひとり、
鞭を揚げて馳せきたり。父胸うち騒ぎて、いかにと問ふに、軍
のあるべきやう、大かたの掟などは、仰の如くその心を得侍
りぬ。若し道の邊りにも、圖らざるに、忝く鳳輦を先立てて御
旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らむに参りあへら
ば、その時の進退いかゞ侍るべからむ。この一事を尋ね申さ

鳳輦



足柄山 静岡縣駿東郡。
箱根山 神奈川縣足柄下
郡。

その時の進退いかゞ侍るべ
からむ。臣下の分として鳳
輦には弓を引くべからず
との泰時の道義心より出
てたる質問。

むとて、ひとり馳歸り侍りき。」といふ。義時とばかり打じじて、「かしこくも問へるをのこかな。そのことなり。まさに君の御輿に向ひて弓をひくことはいかゞあらむ。さばかりの時は、兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申し、身を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましなから軍兵を賜はせば、命を捨てて千人が一人になるまでも戦ふべし。」といひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

都にもおぼし設けつる事なれば、武士ども召しつどへ、宇治勢多の橋も引かせて、敵を防ぐべき用意心ことなり。公經の大將ひとりのみ、御孫のこともさる事にて、北の方一條中納言能保といふ人の女なり。その母北の方は、故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の軽き事とあぶながり給ふ。中院は、飽か

かしこくも問へるをのこかな。泰時の道理至極の質問をほめたることば。

ひとへに云々。君臣の分を重んじたる態度。

急ぎ立ちにけり。大事を前にして一刻も猶豫せざる武士のいさぎよき態度を見る。

宇治 京都府宇治郡。

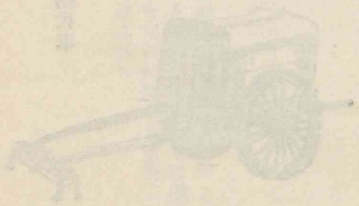
勢多 滋賀縣栗太郡。

公經 西園寺公經。その孫頼經は當時鎌倉將軍なりき。

故大將 源頼朝。

位をすべり給ひしより、言に出でてこそ物し給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御騒ぎにも、殊に交らひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづ軍の事なども掟て仰せられけり。

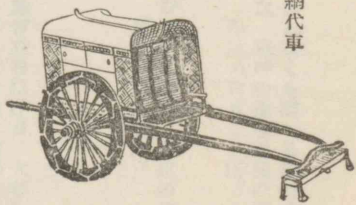
いつの年よりも、五月雨はれ間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲り騒ぎて、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻めのぼる武士どもも怪しく惱めり。かゝれども、遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武士も出でたつ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分ち遣はす。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべて安げなく騒ぎ満ちたり。いかゞあらむと、君も御心亂れておぼし惑ふ。かねては猛く見えし人も、誠のきはになりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひ



たるさまども、頼もしげなし。六月十日餘りにや、いくばくの戦だになくて、遂に御方のいくさ敗れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下たゞ物にぞ當り惑ふ。

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はからひおきてつゝ、保元の例（保元）にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院、宮々、處々におぼし惑ふこと更なり。本院は隱岐國におはしますべければ、先づ鳥羽殿へ、網代車の怪しげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日を限りの御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」とおぼさるゝも甲斐なし。その日、やがて御ぐしおろす。御年四そむに一つ二つや餘らせ給ふらむ。まだいと惜しかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院に奉らせ給はむとな

網代車



保元の例 保元の亂後、崇徳上皇を讃岐に遷し奉れり。

鳥羽殿 城南の離宮。今の京都府紀伊郡鳥羽町にありき。

ものにもがなや「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらの我が身と思はむ」源氏物語河海抄

信實 藤原隆信の子。左京權大夫に至る。肖像畫に巧なり。文永二年歿、年八十有九。
（八三七—一九二五）

七條院 後鳥羽上皇の御生母。

土佐院 土御門天皇。
佐渡院 順徳天皇。

津の國の「津の國のこやとも人をいふべきに隙こそなけれ、蘆の八重葎（和泉式部）」

り。かくて、同じ十三日に御船に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心ち、この世の同じ御身ともおぼされず、いみじういかなりける代々の報にかと恨めし。
六つにて位に即き給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下には同じ事なりしかば、すべて三十六年が程、この國のあるじとして、萬機の政を御心一つに治め、百の官を従へ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有様にて、遠きをあはれみ、近きを撫で給ふ御めぐみ、雨の脚よりも繁ければ、津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざらむことを思しき。藐姑射の山の峯の松も、やう／＼枝を連ねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ、幾春を経ても、空ゆく月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべか

りける世を、ありありて由なき一ふしに、今はかく花の都を
 さへ立ちわかれ、おのが散りたゞにさすらへ、磯の苦屋に軒
 を並べて、おのづから言問ふものとは、浦に釣するあま小
 舟、鹽焼く煙の靡く方をも、わが故郷のしるべかとばかりな
 がめ過ぎせ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りた
 らむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべ
 し、まして何時をはてとか廻り逢ふべき限りだに、なく、雲の
 浪煙の浪の、幾重とも知らぬ境に世を過し給ふべき御様ど
 も、口惜しといふもおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ、里遠き島の中なり。海づら
 よりは少し引入りて、山陰に片添へて、大きやかなる巖の故
 てるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかり
 ことそぎたり。まことに「柴のいほりの只しばし」と、假初に見

柴のいほりの「いづくに
 も生まれずばたり住まて
 あらむ柴の庵のしばしな
 る世に、西行法師」

えたる御やどりなれど、さる方になまめかしく、ゆゑづきて
 しなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになむ
 はるく、と見やらるゝ海の眺望、二千里の外も残りなき心
 ちする、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹きくるをきこ
 しめして、

われこそは新島守よおきの海のあらしなみ風こ
 ころして吹け

同じ世にまたすみの江の月や見むけふこそよそ
 におきの島守

花鳥の外にも春はあり顔にかすみてかゝる山
 のはの月 (順徳天皇)

白雲を空なるものと思ひしはまだ山こえぬ都
 なりけり (土御門天皇)

水無瀬殿 本院の造らせら
 れし殿舎。攝津國三島郡
 島木村廣瀬に在りき。
 二千里の云々
 「三五夜中新月色。
 二千里外故人心。」

増鏡 十卷。作者不詳。後
 鳥羽天皇より後醍醐天皇
 に至る約百五十年間の史
 實を記せり。體裁は大鏡
 に倣ひて、嵯峨の清涼寺
 に於て百餘歳の尼が物語
 りし所を記録せる態とな
 せり。おどろの下・新島
 守・ふぢ衣・三神山・内
 野の雪・烟の末々・おり
 むる雲・山のみみち葉・
 北野の雪・あすか川・草
 枕・老のなみ・今日の日
 影・つげの小櫛・浦千鳥・
 秋のみ山・春のわかれ・
 村時雨・久米のさら山・月
 草の花」の二十篇より成
 る。

八 壹岐の島にて

折口 信夫

志賀の鼻を出離れても、内海とかはらぬ静かな風ぎであつた。舳の向き加減で時たまさし替る光を、蝙蝠傘に調節してよけながら、玄界の空にまつ直に昇る船の煙に、目を凝してゐた。艫のふなべり枕に寝てゐて、しぶき一雫うけぬ位である。時々、首を擡げて見やると、壹州らしい海神の頭飾の島が、段々寄生具になり、鵜の鳥になりして、やつと其の國らしい姿に整うて來た。あの波止場を、此の巡航汽船が出てから、もう三時間も経つてゐる。大海の中にほつんと産み棄てられた様な様子が「天一柱」と言ふ島の古名に、如何にもふさはしいといふ聯想と、幽かな感傷とを導いた。

土用過ぎの日の、傾き加減になつてから、波ばかりざらざら

折口信夫 明治二十年、大阪市に生る。文學博士。國學院大學教授。慶應大學教授。

志賀 志賀島。福岡縣（筑前國）に屬し、福岡灣の東側を擁す。

玄界 玄界灘。福岡縣（筑前國）の北方。

壹州 壹岐國。九州地方北部の島國。長崎縣の管下。

天一柱 古事記上卷に、伊伎島、天のひとつばしらといふと。

蘆邊浦 壹岐十二浦の一。壹岐郡田河村の海岸。

瀬戸の濱 瀬戸浦。蘆邊浦の東北に接す。

郷野浦 壹岐郡武生水（ムシャツツ）村の海。

ら光る、蘆邊浦に這入つた。目の醒めた瞬間、ほかにも荷役に寄つた蒸気があるのかと思つた。それ程、がらにない太い汽笛を響かして、岸前の瀬戸の濱へかけて、はしけの客を促して居る。博多から油照りの船路に、乗り倦いた人々は、まだ郷野浦行きの自動車の間には合ふだらうかななどと案じながらも、やつはりおりて行つた。

島にもかうした閑雅が見出されるかと、行かぬ先から壹岐びとに親しみと、豊かな期待を持たせられたのは、先の程まで、私の近くに小半日むつつりと波ばかり眺めて居た少年であつた。福岡大學病院の札のついた薬瓶を持つて居る様だから、多分、投げ出して居た、その繻帶した脚の手術を受けに行つて居たのであらう。膝きりの白緋の筒袖に、パンツの様な物をつけて、腰を瓢箪くびりに皮帶で締めてゐた。十

パンツ 運動用ズボン。

六七だらう。日にも焦けて居ない。頬は落ちて居るが、薄い感じの皮膚に、少年期の末を印象する臆劫さうな瞳が、眞黒に瞬いてゐた。船室の乗りあひの衆がおりて行つて後も、前後四時間かうして無言に青空ばかり仰いでゐる私の側に、海の面をしきりに眺めてゐた。

時々頭を擡げると、いつも此の少年の目に觸れた。大學病院へ通つてゐましたか。ぐらゐの話を入みしりする私でもしかけて見たくなつた程、好感に充ちた無言の行であつた。島の村々を、鰯干し、鮫買ひ集めに、自轉車で廻る小さい海産物屋の息子で、丁稚替りをさせられてゐると言つた風の姿である。それでゐて、沖繩に四十日ゐて、潮風で澁紙色に染まつた皮膚と、頑丈な骨格とで仕立てられた男女の顔ばかり見て暮した目のせゐるか、東京の教養ある若者にも、ちよつと

ない静けさだと思つた。なる程、壹岐には京大阪の好い血の流れが通うてゐる。早合點に、私は豫定の二十日は、氣持よく島人と物を言ひ合ふ事の出來さうな氣を起してゐた。
此の島では、つい七十年前まで、上方の都への消息に、もしほたれつ、わびしい光陰の過し難さを訴へてやつた人たちが住んでゐた。さすがに、磯藻の様になづさひ寄る島びとの心づくしに、欠伸を忘れる暇もあつた。幾代のさうした教養ある流され人の、潮風あたる石塔には、今も香花を絶やさぬ血筋が残つてゐる。この静かな目は、海部や、寄百姓の心理をつきとめても、出て來るものではないだらう。「島の人生」に人生の憂ひを齎した流人たちは、所在なさと人懐しきと後悔のせつなさをまづ深く感じ、これを無爲の島人に傳へたであらう。

もしほたれつ、古今集に「わくらはに問ふ人あらば須まの浦にもしほ垂れつゝわふと答へよ。在原行平」と。これは、行平が配所須磨にて詠みし歌。

海部 漁業を以て生活する部族。
寄百姓 他國から寄り集りし農夫。

「島の人生」に人生の憂ひを齎した流人たちは、所在なさと人懐しきと後悔のせつなさをまづ深く感じ、これを無爲の島人に傳へたであらう。

此の島人が信じてゐる最初のやはれ人百合若大臣以來、島の南に向いた崎々には、どの岩も此の岩も、思ひ入つた目にこじむ雫で濡れなかつたのはなからう。都びとには概念であつたものゝあはれは、沖の小島の人の頭には、實感として生きてゐた。

だが、其れが民謡の形となるには、別の事情が入用であつた。島には其の要件が調うてゐなかつた。島の開發は、わりあひに遅れてゐた。唄も樂器も踊も、地方で十分藝道化した時代であつた。特殊な傳説もない島の藝術は、皆、百姓と共に寄つて來た。祭禮も宴會も儀式も、必しも歌謡を要せなくなつた時代に始まつた文明は、後々までも、固有の歌を生まないのである。動機もあり、欲求もあつて、其の様式がなかつたのである。地方から傳はる唄を謳ふ位では、其が新しい音樂

百合若大臣 傳説の人。平城天皇の朝、豊後の旗頭太宰太郎和田丸は、當時九州に來寇せる蒙古軍征討の勅を受け百合若大臣の稱を賜はり、出征して外敵を破る。偶々その部下別府雲足・雲澄兄弟は、百合若の睡眠癖あるを利用し、主君を玄界の孤島に置き去りにして、歸朝し、戦死と復命してその國を横領す。

を孕み、文學を生み落す懸け聲にはならなかつた。悲しんでも、其を發散させる歌もない心は、愈、瞳を黒くした。夏霞の底に動かぬ島山の木立の色の様に、靜に沈んで、凝つて行つた。八木節のはやつた年であつた。又、私も「かれすゝき」のはやり唄を、二三日前、長崎の町で聞いた時分であつた。心の底に湧き立つ雲の様な調子を、小唄の拍子に、でも表はさねば、やり場のない様な氣分の年配である。まだ病後の臆劫さが残つてゐるのかと思ふと、尠くとも目をあげた顔には、一面、若い快さを湛へてゐるではないか。舷にかけた腕も、投げる脚、折り立つた膝も、すべて白緋が身に叶ふ如くさつぱりと、皮帶のきりゝとした如く凜として居る。よい家、よい村、よい社會を思はせる純良な少年の身のこなし、潤んだ目に、まづ島人の感情と禮讓とを測定した事であつた。

八木節 上州(群馬縣)八木郷より起れる地方俚謡。かれすゝき 大正十一年秋頃より東京を中心として各地に行はれたる流行民謡。利根川べりの枯すゝきに感傷の念をよせたもの。

私の空想が、とんでもない方へ行つてゐる間に、此の若者の姿が見えなくなつた。船窓の下から、兩方へ漕ぎ別れて行つた二艘の一つに、黒瞳の子は薬瓶のハンケチの包みをさげて立つてゐる。瀬戸の岸へ歸るのだ。此の島にゐる間に、復此の壹岐びとの内界を代表した目の主に、行き會ふこともあるだらうか。幾年にもない若々しい詩人見たいな感情をおこして居ると、旅の心がしめつほくなつて來る。そんなことはよしにして、まあ初めて目に入る島國の土地の印象を、十分にとり込まう。

九 岡部日記

賀茂 眞淵

あはれ都にありつる程は、あからさまながら年のはに故郷に歸りなどしければ、さのみもあらざりしを、今はたはやすくも歸るまじく思ひなしつれば、千里の遠に老いたるたらちねを置きまつりて、とみの事ありともいかにかかしらんとし、ともいかにかかともいかにゆきいたらん、今やいかなる事かあらん、いかなる心にかますらんなど、人やりならぬ胸さわがれつること日ごとにありしを、世のさがはあはれなるものにて、うつたへに忘るとはあらねども、友がきもいで來て、高きいやしきゆきかひしけるに、二つなき心のまぎれやすくて過しぬ。此の秋はいざなふ人さへあれば、いでや母をも

賀茂眞淵、縣居と號す。遠江國の人。國學四大人の一。歌人。明和六年(四九)歿、年七十三。

都にありつる程云々 享保十八年(三五)三十七歲にて京都に上り、荷田春滿に師事しゐたる四年の間。今は 元文三年(三九)江戸に出府以後。

をがみ、つま子はらからにも逢はばやとて後の七月八日つ
とめてたち出づ。

此のあらましい頃、人々別れ惜しむとてからやまとの
歌、ひも百ばかりもあらんかし。そはこと物にしるしつ。友がき
のなごりなきにしもあらねど、ちぎりおく日數いくばくな
らねば、先すゝまるゝ心には痛しとも思ほえず。
品川の驛うづらわたりは、海の面ゆほびかなり。夜の雨晴れて、白
雲おほく、海の空にかゝれるは、伊豆のみ崎と安房の大山と
なり。此の所は袖の浦とぞいふなど、あをだかく奴のみだり
に言ふは、をかしきものから、いづくにまれ、ときあらひぎぬ
着ん日までは、其の名のゆかしきや。朝風いとゞしく身にし
むに

旅人は衣手さむししばしなほ

「關吹きこゆる」など詠みけん思ひ出でらる。富士の山はひ
つじさるの空に見ゆ。是ぞおのが眺むる方なるに、故郷人は
こなたをこそと思ふもこたびはうれし。をちつとし東に來
にけるほどに

東路にありて聞きつる富士の根を

夕日の空にかへりみるかな
とながめて、かぎりなく遠くも來にけりとわびつるには
かはれり。

二 箱根山

夕つけて箱根山にかゝる。關まではしるしとて、畑といふ
所にやどる。いとや夜さむなれば、ねもいらぬに、瀧の音、鹿
の聲、うちこめたる山の秋風、聞きあかされて立ち出でぬ。ほ

關吹きこゆる 秋風の關吹
きこゆるたびごとに聲う
ち添ふる須まの浦波(新
古今集)。

のぼのと明けゆく山のかひよりかへり見れば、朝霧しろく
 たちわたれるは海を見ん心地す。關こゆる程、日さしのぼり
 て、湖の面のどかに見たさる。かなたこなた山をめぐれる
 水の面は、三巴といふや似つらん。蠶叢さんそうに擬したる人はたれ
 ばかりなるや。其の後いくそばくの人かのぞみ見けん。此の
 湖にさせる聞えなきぞあやなき。
 すべてみ山は雨ばかりあはれなるはなし。こゝかしこく
 ゆり出づる雲の、うすき濃きに、山々はおもかげばかりぞ見
 ゆる。人面より起る。と吟じて越えつる、苦しからぬにしもあ
 らねど、あなをかしと見しはといふに、人々は例の僻心にこ
 そ、いぶせかるべき物ごのみなめり。龍にのるらん山人にや
 あつらへましなど笑ふ。辛うじて三島の驛に至る。ふるき歌
 に「ちゝの實の父」とつゞけしは、木の實にて、此の國にありと

湖 蘆の湖。
 三巴 支那、四川省の地名。
 蠶叢 蜀の開祖の王の名。
 因つて、蜀の地を指す。

人面より起る 山從人面
 起、雲傍馬頭一生李白。

ちゝの實 銀杏のこと。
 「父」の枕詞に用う。

いふ人のありしかば、問ひ求むれど見知れる人もなし。

故郷のはゝその蔭はとひゆけど

ちゝのみなきぞ悲しかりける

三 岡部の家

くれ過ぐるほど岡部の家にいたる。まことに門によりて
 待ちうけ給ふ。いとけなき姪どもなど、走せ來れども、見知ら
 ぬ顔なればにやあらんとみにもむつれず、なれしばかりの
 人々は、髪によもぎは似ずなりぬめれど、くにぶりの詞のみ
 や、しるかりけん、いづれの所よりとは問はざりける。常はし
 たしからぬさへ訪ひ來て、日に日にかたらふに、庭のよもぎ
 も、露かわくひまのありげなり。ここに迄來りにければ京に
 もと思ひぬれど、東にちぎりつる日數しあれば、こたみはえ
 まうでぬを、やんごとなきあたりあしからず申し入れ給ひ

はゝ(そ)柞 櫛の異名。
 「母」の枕詞。

ねと文つかはす。

鼠

しなのなるすがの荒野を飛ぶ鷲の

つばさもたはに吹くあらしかな

倭文

いにしへの倭文機衣はたしろもきし世こそ

おりたちてのみ忍ばれにけれ

田家鳥

なるこ引く門田の稻のほどもなく

立ちてはかへるむらすゝめかな

海眺望

播磨瀉泊門せの入り目のすゑ晴れて

空よりかへる沖のつりぶね

縣居にて

こほろぎの鳴くや縣の我が宿に

月かげきよし訪ふひともがな

(賀茂翁家集)

一〇 月は世々の形見

室 鳩 巢

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋の氣色たちて、萩
 吹く風も身にしむ頃なり。久しく翁のがり行かねば、このほ
 どの老のねざめもおぼつかなし。いざ尋ね問はん。とて、或夕
 暮に例の人々うち連れて來しが、「またも參らん。」とて歸らん
 とせしを、翁止めて、「今宵は月もよし。薄酒進め奉らん。しひて
 とまり給へ。」といへば、「翁の心をいかで背くべき。さあらば。」
 とて、各座をしめて、清談の露やうく、繁きほどに、家人やが
 て心得て、取り敢へぬまでにあるじまうけし、肴取り添へて、
 盃出しけり。諸客皆酔ひて、興に入るとぞ見えし。
 さて翁いふやう「大かたは月をもめでじ。」とは詠みたれ
 ども、老の心も、月見るにぞ慰みはべる。されど、それにつきて、

室鳩巢 名は直清。江戸の
 人。徳川幕府の儒官。享
 保十九年(三五四)歿、年七
 十七。



薄酒 「粗酒」の意。

大かたは云々 古今集に
 「大方は月をもめてじこ
 れぞこのつもれば人の老
 となるもの。在原業平」
 と。

千載無窮の感も起りぬれば、うべ月を「人の老となる。」ともいふべかめり。但し、月を見るにいろ／＼あり。今思ひ出しはべり。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、獨り隅に向かひてゐたりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつく／＼と見て、「月は徑幾尺かあるべき。各考へて見給へ」といふ。また同じやうの人か、たへより、「あれはものの切口と見ゆ。奥へ長さいかほどかあらん。」とて、たがひに僉議しけるを、聞く人々皆舌を食ひけり。翁も幼心にをかしかりき。今思へば、世俗月を賞して光の明きを誇り、影の清きにめでて、良夜とてたゞうち寄り、もの食ひ酒飲みなどして、歌ひの、しるを樂しみとするは、かの寸尺を語るに等しかりぬべし。また騷人・墨客の月を詠めて、字毎に金玉を雕り、句毎に錦繡を裁するも、風雅には聞こゆれど、それもたゞ景氣の上を翫ぶばかりにて、月

に深き感あることを知らぬなるべし。

翁が千載無窮の感と申すは、我が儕古人を慕ひて、その書を讀み、その心を知りつゝ、常に世を隔てたる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照らし來て今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影も映るやうに覚え、月はものいはねども語るやうにも覚え、忘れては昔のことを問はまほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣を棄てて、一氣に古今を洞觀して、「青天有月來幾時」といひ出づるより、氣象の高さ、拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべきことがらにあらざ。昔より李杜とて、杜甫が上に稱するも、理にてこそはべれ。然れども、李白が詩も古今流水の如きを感じずるまでにて、後代を待つ心の見えぬ翁、昔楚辭を讀みて「往者余不及、來者吾

李白 字は太白。青蓮と號す。唐の玄宗時代の大詩人。

杜甫 字は子美。少陵と號す。李白と名を齊しうしたる唐の詩人。

楚辭 支那楚の屈平及びその門下・後輩の辭賦を後漢の劉向が編輯せしもの。

不聞。』といふに至りて、屈子が心を推量りつゝ、感にたへずな
ん覚えし。この二句の意を思ふに、屈子一代に知己なきを悲
しみて、古人は誠に我が心を得たれば、あはれ一たびあうて
語らんと思へど、その世に及ばねばかなはず。また末の世に
さる人のありて、我と心を同じうすらんと思へど、その人を
聞かねば、誰とか知らんとぞ。これ獨り屈子に限らず、古今心
あるきは、大方この恨なきにしもあらず。翁もこの心にて
月を見ればにや、いと感深く覺ゆるなり。元より今は末の
世の昔なれば、いづれの世にか、また我が如く月に對して、今
をしのぶ人もあらん。月はさこそその世をも照らすらめ。若
しあつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をものこ
さましと思ひはべる。その意を、
月みれば末の世までもしのばれて

屈子 名は平。支那戰國時
代楚の國の人。

みぬいにしへのいとどゆかしき
こゝをもて、翁が月に無窮の感ありといへるを、諸君考へ見
給へ。いはれなきにはあらず。」
（駿臺雜話）

何事もかはりもてゆく世の中に

同じかけにてすめる月かな

雲の上や古き都となりにけり

すむらむ月の影は變らで

古を何につけてか思ひいでむ

月さへかはる世ならましかば

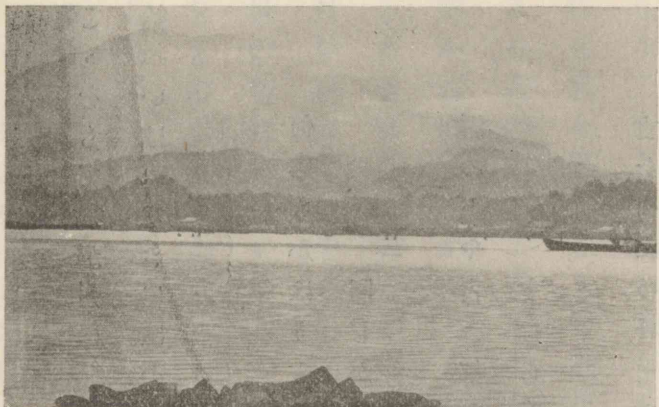
（西行法師）

駿臺雜話 五卷。室鳩巢の
隨筆。

西行法師 俗稱佐藤義清。
歌人。建久元年（一一六〇）歿、
年七十三。

二 銀河序

松尾芭蕉



北陸道に行脚して越後の國出雲崎といふ處に泊る。かの佐渡が島は、海の面十八里、滄波を隔てて東西三十五里によこをりふしたり。峯の嶮難、谷のくまふ、までさすがに手にとるばかりあざやかに見渡さる。むべこの島は黄金多く出で、普く世の寶となれば、限なきめでたき島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ遠流せらるゝによりて、たゞ恐しき名の聞えあるも本

松尾芭蕉 俳人。名は宗房。伊賀の人。元禄七年（三十四）没、年五十一。
出雲崎 新潟縣三島郡にある町名。

挿繪 佐渡ヶ島金山。

意なき事に思ひて、窓押開きて暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈んで月ほのぐらく、銀河半天にかゝりて星きら／＼と亘えたるに、沖のかたより波の音ししばはこびて、魂削るが如く、腸ちぎれてそゞろに悲しび來たれば、草の枕も定まらず、墨の袂何ゆゑとはなくて、しぼるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふ天の川

（風俗文選）

風俗文選 十卷。芭蕉以下蕉門俳人二十七名の俳文を収む。寶永三年森川許六の編。

天の川、月の御船もかけ添ひて、逢ふ瀬の波もゆたかなるに、後夜まさに明けんとす。しきりに涼風颯々の聲に驚きて、見ればそなたにたなびける、横雲靜かに消え、曙の山や残るらん。

（謠曲、七夕）

三 義經の八艘飛び

島津久基

今日は「義經の八艘飛び」といふ、何だかたわいもない童話めいた題目を掲げましたが、一體私は子供の時から、何がなしに牛若丸の義經が好きだつたのでございます。そして、子供心のまだ失せきらぬ私の眼の前には、今もなほ小さい私の胸に刻みつけられた時のまゝの、あの九郎判官といふ小國民的英雄が、忘れ得ぬ面影に常に生きてゐるのでございます。そしてこれは私ばかりでなく、皆様の中にも同じやうな方が恐らくは少なからずいらつしやるのではないかと思ひます。

平治の亂に敗れて、伏見の雪に艱む常磐母子、鞍馬山僧正ヶ谷に木葉天狗を相手に武を鍊る牛若丸、金賣吉次がお供

島津久基 明治二十四年、鹿兒島縣に生る。國文學者。

平治の亂 二條天皇の平治元年（一一七二）十二月、藤原信賴・源義朝反し、後白河上皇を幽し、天皇を遷

しての奥州下り、鏡の宿に宿つての強盜熊坂長範の一類討滅さては鬼一法眼を服させて兵法虎の巻を手にも収め、五條の橋に大の荒法師辨慶を翻弄して、終に主従の契約を結ばせる幼少年時代から、鴨越えの坂落し、屋島壇の浦の奇捷と、赫々たる武勳時代を経て、しかもその功報いらぬのみか、梶原が逆鱗の遺恨は却つて得失地をかへて、言々血を吐く腰越の申状も容れられず、偽りの起請文の土佐坊が堀川の夜討となり、終に都落ちの果ては、大物の浦の難船、吉野山の落魄、靜御前との別離、忠信の身替り、運命は愈々天地を狭めて、北國落ちの主従が山伏姿は、安宅の勸進帳、笈探しの危難となり、漸く辨慶の智勇によつて辛く虎口を遁れ、第二の故郷と懐かしむ奥の秀衡が館へ安堵の息をつき流したと思ふたは束の間、不忠不義の泰衡に賣られて、あはれや高館に末

し奉る。信賴誅せられて亂平ぐ。
 常磐御前 源義朝の妾。平治の亂後、今若・乙若・牛若の三子を携へて大和國龍門の里にかくる。後、三子の助命を六波羅の平清盛に請ふ。
 牛若丸 母の嘆願により、助命せられて鞍馬寺の僧覺日に師事す。
 金賣吉次 京都三條の兩替商。奥州に往く途、牛若に會して共に俱にす。
 熊坂長範 大盜。近江國鏡宿に金賣吉次の貨を奪はんとし、却りて牛若に殺さる。
 鬼一法眼 京都一條堀川の邊に住みし陰陽師。文武兩道の達人。
 梶原の逆鱗 壽永四年、義經將に平氏を屋島に襲はんとし舟師を備ふ。梶原景時、逆鱗を設けんとす。義經その議をしりぞく。景時怨みて頼朝に讒言す。
 腰越 相模國（神奈川縣）鎌

路の悲しみを留め、數奇の一生を命運のまに／＼夢と衣川に流した九郎御曹司は、まことに敬慕と同情とを寄せずには居られない、我等の幼生こせなひからの見ぬ世の友であり、我等の最も好きな史上の人物であります。

いや、私達ばかりではないのであります。既に當時から、かの若き天才將軍の武名と功業と又人柄と境遇とは、多くの讚美者共鳴者を有してゐたことは、あの平家の榮枯盛衰を寫し敘してゐる平家物語源平盛衰記が、一見義經文學の觀すら示してゐるかに見えるにも想像せられます。兼好法師の徒然草の中に、平家物語の事を記した段に

行長入道、平家物語を作りて、生佛といひける盲目に教へて語らせけり。中略九郎判官の事は委しく知りて書き載せけり。蒲の冠者の事は能く知らざりけるにや、多くの事

倉那の地名。鎌倉の門戸にあたる。

堀川の夜討 土佐坊昌俊、頼朝の命により、文治元年十月、義經を京都堀川の館に襲ひ、却つて斬らる。

大物の浦云々 文治元年十一月、義經、西國に行かんとし攝津國大物浦（尼が崎の海岸）より乗船したるも風浪高くして岸に歸る。

忠信 佐藤氏。義經の寵臣。安宅 加賀國（石川縣）能美郡の地名。文治三年二月、義經伴りて安宅關を過ぐ。

泰衡 藤原氏。秀衡の子。行長 信濃前司行長入道。後鳥羽天皇の朝の人。

蒲の冠者 源範賴。

共を記し漏らせり。と見えてをりますが、同じ兄弟の範賴に比しても、餘りにその光のかゞやかしいのを、餘りにその同情者の廣く多いことを、承認させられぬわけにはゆかないのであります。

更に室町時代になりました。義經を主人公とした歴史小説「義經記」が出来、又謡曲に幸若舞曲に非常に多くの判官物事が作られ、これを繼承した徳川期には、淨瑠璃に歌舞伎に、種の歌曲に小説に、同じく當代武勇傳説の大立物である曾我の十郎・五郎、並びに虎御前・祐經朝比奈の面々に對抗して、これに義經辨慶・靜御前・繼信・忠信に梶原富樫など、役々揃ひで以て無数の義經傳説と義經文學とを發生させ展開させ、今日に至つてもなほ繰り返し上演・愛讀せられるものが少なくないことは、皆様よく御承知のことと存じます。

幸若舞 室町時代より戰國時代にかけて流行したる舞曲。

この昔から今に變らぬ義經愛好熱、所謂「判官最良」は、祖先英雄に對する崇拜、國民的理想人へのあこがれ、而して弱者に對する任侠義憤のほとばしりの融合から生れ出る、我が國民性に根ざす美しい淨い情熱の結晶でありまして、この心持の中に我が義經は千古に生きてゐるのであります。そして、史實に何等徴すべきものなき彼の幼少時代の半生は、又失脚以後の不分明な彼等主従一行の行動は、實にこの「判官最良」の心から様々な空想に満ちた興趣深い姿に彩られてしまつてゐるのであります。衣川の館に三十一歳を一期として自刃した名將を痛惜するのあまり、ひそかに生き脱れて蝦夷に押し渡り、更に發展して北滿の野に雄圖を唱ふるに至らしめたものは、これ亦我が民族の海外發展の意氣の發露であると共に、この止る所を知らざる「判官最良」の情

衣川の館に云々 文治五年
(一八四〇)四月のこと。

念の飛躍であります。

かくて「判官最良」は、義經の一生を愈傳説化し愈文學化し、そして又この傳説化、文學化せられた義經に向つて、更に一段と濃く深い「判官最良」を注いでゆくのであります。歴史家はその史實の正しいことを探り究め、史上の人物の傳記の眞を求め傳へようとするのが任務であります。我が義經の一生は、この冷靜な史家達の眼から眺められる時、如何に虚飾粉黛に満ちてゐることでありませう。その時史家は容赦なく、義經に着せてある傳説の衣を、俗説である、誤傳である、として剥いで捨ててしまふのであります。後には眞の史的人物としての義經が残りませう。しかしその姿は如何に淋しいことでありませう。その時私達は、歴史家達の惜し氣もなく脱ぎ捨てた傳説の衣を、恭しく拾ひ上げて、それを三保

の松原の漁夫白龍が獲たといふ天人の羽衣のやうに、國の寶家の寶と珍重せずには居られないのであります。何となれば、それは或は義經彼自身ではないかも知れません。しか



しそれは、我等の祖先達が、日本國民が、總がかりで長い間かゝつて義經に着せかけてやりましたところの、或は手織の、或は舶來の、心づくしの、色とりどりの模様さまざまの、尊い魂の織物であるからであります。國民傳説、そこにこそ普遍的な國民精神の無邪氣な偽りなき表現があり、そこにこそ我々自身が住んでゐるからであります。

三保の松原の云々 謡曲「羽衣」(本書卷九第十四課)に見えたる傳説。

挿繪 源義經(前賢故實)。

かうして私共は、數多くの義經傳説にそれらの意義と興味とを劣らず見出すことが出来るのであります。

さて、「義經の八艘飛び」であります。子供の時分からよく聞かされた珍らしげのないお話であります。頃は元暦二年三月二十四日、都を追はれ、一の谷を落され、屋島を焼かれ、西海に走つた平家の一門、さしも榮華の昨日の夢も、今は一瞬にして、こゝ長門壇の浦の海底に一族の屍と共に葬り去られようとする斷末魔、いでや最期の思ひ出に、あはよくば目指す敵の大將九郎に近づいて組み、冥途の道連れござんなれと、平家の大勇士能登守平教經、血眼になつて荒れまはるうち、はたと義經の船に行きあひました。しや小冠者ひつ捕へようとする、義經は小長刀をかいこんだまゝ、一躍二丈ばかり隔てた次の船に跳び移ると、教經は殘念と齒がみし

元暦二年 安徳天皇の御代の壽永四年。(八四三)

平教經 教盛の子。能登守。正五位下。

て後を逐ひ、従つて追ひ入れれば従つて跳び遁れ、船八艘を追ひ廻りましたが、武運めでたい義經は、終に能登守の手に懸らず、先には屋島の浦で射放つた矢面に佐藤三郎兵衛繼信が身替りの討死、今日こそと思ふ教經決死の奮闘も遂に目的を果さず、啞然として九郎の後を見送るばかり、數多の源氏の兵に遮られ、安藝太郎兄弟を左右に挟んだまゝ、海中へ跳り入つて壯烈な死を遂げたといふ一場の物語であります。

この傳説は餘りに童話的である爲に、義經に關する一代記風の武者繪などには必ず逸せられてない代りに、稍實録めいたものには、これほど完成した形では記されてないのであります。八艘飛びの「とび」は實は跳躍の「跳び」の字でありませうが、飛躍の「飛び」の字が書かれるやうになつてゐると

佐藤繼信 義經の寵臣。後に吉野山で死したる忠信の兄。

ころに、却つて傳説的の面白味があることは、鴨越えの坂落し「が」逆落し」と書かれるやうになつてゐると同じ傳説心理であります。

そしてこの八艘飛びの鬼ごつこをやる二人の武人は、何れもその動作の輕捷機敏な點に於て著しく神人的で、しかもその廻り燈籠式の運動は、随分と滑稽味を含んで居ります。が、いかな名將九郎御曹司でも、ちと輕業が上手すぎます。尤も牛若丸のその昔、鞍馬山で大天狗僧正坊から天狗飛び切りの祕術を授かつてゐるといふのですから、朝飯前のこともかも知れませんが、その手際の鮮かさと、こゝまでおいで、甘酒進上」といふ大膽振りには、衆人環視の中にあつての闘戦の巷とは思はれぬ暢氣さであります。かうして我等の義經と一緒になつて國民は楽しみながら、能登守を弄つて遊ぶ

のであります。それが平家第一の大勇士であるだけに、一層右の意味が大きくなり、又同時に義經の武運めでたい大将であることを、教經と共に國民一般が肯定するのであります。あの曲藝的な弓流しと、この輕業式の八艘飛びとが、義經得意時代に屬する傳説中、相並んで觀衆をして固唾を嚙み、手に汗を握らせながら、嘆賞と安堵と満足との結末に國民を導くに至つては、一であります。

是は故左馬頭殿の子息、九條の曹司常盤が腹に牛若と申侍しが、後には遮那王とて、京の北山鞍馬寺にありしかども、世の中住みわびて、奥州に下りて男になり、九郎冠者義經と申す者にて侍るが、佐殿、平家追討の披露あるによつて、御力をつけ奉らん爲に、夜を日に繼いで馳せ參つて候。

(浮島が原にて、義經—源平盛衰記)

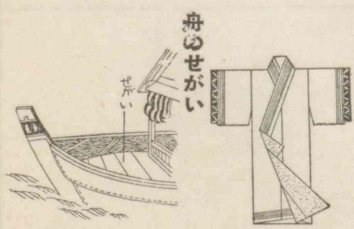
一三 扇の的

さる程に、阿波讚岐に、平家に背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの嶺、こゝの洞より、十四五騎、二十騎打ち連れ打ち連れ馳せ來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引き退く處に、沖より尋常に飾つたる小舟一艘、汀へ向つて漕ぎ寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、舟を横ざまになす。あれはいかにと見る處に、舟の中より年のよほひ十八九ばかりなる女房の、柳の五つ衣に紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出いたるを、舟のせがいに挟み立て、陸に向いてぞ招きける。判官、後藤兵衛實基を召して、「あれはいかに」と宣へば、射よとにこそ候ふらめ。たゞし大將軍の矢おもてに進んで、傾城を

さるほどに 壽永四年(八四)五月二日のこと。

判官 源九郎判官義經。

七八段 距離の單位。一段は六間。
五つ衣



御覽ぜられん處を、手だれに狙うて射落せとの謀とこそ存



ば、判官さらば與一呼べ。」とて召されけり。

じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候ふらん。」と申しければ、判官、味方に射つべき仁は誰かある。」と問ひたまへば、「手だれども多く候ふ中に、下野の國の住、那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ、小兵では候へども手は利いて候ふ。」と申す。判官、「證據があるか。」さん候。かけ鳥などを争うて、三つに二つは必ず射落し候ふ。」と申しけれ

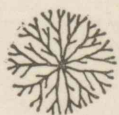
挿繪 判官與一を召す。
(源平盛衰記圖繪)

與一其の頃は、未だ二十ばかりの男なり、褐かみかに赤地の錦をもつておほくびおほくびはた袖はたそでいろへたる直垂に、萌黄緘もへいせきの鎧着て、足白の太刀を佩き、二十四差いたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わり合はせてはいだりけるぬための鏑かぶをぞ差し添へたる。重籐の弓脇ゆかりに挟み、冑むすをば脱いで高紐たかねいにかけ、判官の御前にかしこまる。判官、いかに與一、あの扇のまん中射て、敵に見物させよかし。」と宣へば、與一、「つかまつとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き味方の御弓矢の疵きずにて候ふべし。一定仕らうずる仁に、仰せつけらるべうもや候ふらん。」と申しければ、判官大きに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國に向はんずる者どもは、みな義経が下知を背くべからず。それに少しも仔細しじゆを存ぜん人々は、是よりとくく鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。與一、重ねて辭せば悪しか

おほくび 領(エリ)のこ
と。
はたそで 袖二幅半のう
ち、袖口の方の半幅。
足白の太刀 緒を通す金具
を銀で作つた太刀。

りなんとや思ひけん、さ候はば、外れんをば存じ候はず、御詫
 で候へば、仕つてこそ見候はめ、とて御前をまかり立ち、黒き
 馬の太く逞しきに、まろほや摺つたる金覆輪の鞍おいて乗
 つたりけるが、弓取り直し、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩
 ませける。味方の兵ども、與一が後を遙に見送つて、此の若者
 一定仕らうずると覺え候ふ、と申しければ、判官も頼もしげ
 にぞ見給ひける。矢頃少し遠かりければ、海の中一段ばかり
 打ち入つたりけれども、なほ扇のあはひは七段ばかりもあ
 るらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻ばかり
 のことなるに、折ふし北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高
 かりけり。舟はゆりあげゆりすゑ漂へば、扇もくしに定らず
 ひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には
 源氏くつばみを並べて之を見る。何れもく、晴ならずとい

まろほや やどり木の様を
 丸くあらはしたるもの。



まろほやの字太夫。
 白の太夫、都の御前、金
 丸の太夫、都の御前、金
 丸の太夫、都の御前、金

ふことなし。與一目をふさいで、南無八幡大菩薩、別しては我
 が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須の湯泉、大明神、願はく
 はあの扇のまん中射させてたばせ給へ。これを射損ずるも
 のならば、弓切り折り自害して、人に再び面を向ふべからず。
 今一度本國へ歸さんと思し召さば、此の矢外させ給ふな、と、
 心の中に祈念して目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、
 扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鎗を取つて番ひ、よつ
 引いてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三ぶせ、弓は強し、
 鎗は浦響くほどに長なりして、あやまたず扇の要際一寸ば
 かりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鎗は海へ入りければ、
 扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へ
 さつとぞ散つたりける。皆くれなるの扇の日出いたるが、夕
 日の輝くに白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖

わが國 那須與市の生國下
 野。
 日光の權現 栃木縣日光山
 の二荒山神社。事代主命
 を祀る。
 宇都の宮 同縣宇都宮の二
 荒山神社。
 湯泉大明神 同縣那須郡那
 須山にあり。



には平家舷をたゝいて感じたり陸には源氏舷をたゝいて
どよめきけり。 —〔平家物語〕—

題那須宗高射扇圖

兩軍相亂走。櫓、櫓、櫓。
紅袂、香、翻、屋、島、風。
一箭、若、非、穿、扇、設。
神謀、還、缺、萬、夫、雄。

(東條琴臺)

平家物語 異本多し。鎌倉時代の戦記本。平氏の物興より滅亡までを記す。作者不詳。



おおよそ世に傳へ遺されたる歴史は多かれど、平家の都落ばかり哀にも又めざましきはなかるべし。南都の餘燼未ださめず、墨股の勝鬨なほ響きたるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎、はや比叡のあなたに充ち満ちぬ。宇治淀の備もろくも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。あはれ世はかく憂きをみ吉野の山のあなたに隠れがは無きか。いざさらばやみなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の行幸に御供して、一旦の凌辱を忍びてん。生死も知らぬこの別れ路、再び歸り來べき都ならねばとて、六波羅池殿西八條以下、一門譜第の邸宅、宿房、京、白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となし

一四 平家雜感

高山樗牛

一都落

おおよそ世に傳へ遺されたる歴史は多かれど、平家の都落ばかり哀にも又めざましきはなかるべし。南都の餘燼未ださめず、墨股の勝鬨なほ響きたるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎、はや比叡のあなたに充ち満ちぬ。宇治淀の備もろくも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。あはれ世はかく憂きをみ吉野の山のあなたに隠れがは無きか。いざさらばやみなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の行幸に御供して、一旦の凌辱を忍びてん。生死も知らぬこの別れ路、再び歸り來べき都ならねばとて、六波羅池殿西八條以下、一門譜第の邸宅、宿房、京、白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となし

高山樗牛 名は林次郎。評論家。文學博士。山形縣の人。明治三十五年歿、年三十二。

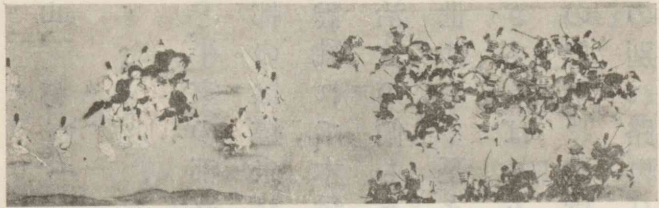
南都の餘燼 治承四年二月平重衡、東大寺等を焼く。

墨股の勝鬨 養和元年三月平知盛等、源氏を美濃の墨股川に破る。

比叡のあなたに 壽永二年七月義仲、叡山に據る。

み吉野の山の……「みよし野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ」(古今集)

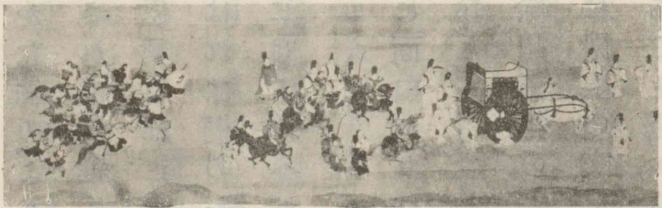
果てぬるこそあわたゞしかりしか。
 こゝに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜々かなしむ。保元
 このかた天下の榮華をつくしたる花の都
 を、燒野の原と顧みて、末は煙の浪、雲の浪、行
 方も知らずさすらふらん。直衣束帶の身に
 も今は黒金の衣をつけたれど、詠歌の餘哀
 に狂れて、弓矢の響を勵まん心ちせず。さて
 も棄て難き命や、今こそはうき世なれ。さす
 がに偲ばるゝ昔の様の夢に入るをばいか
 にかせん。翠華搖々として、西に向へば、秋風
 到る處の野に満てり。嗚呼、きのふは東關の
 もとに轡をならべて十萬餘騎、けふは西海
 の波に纜を解きて七千餘人行方の空は分



燒野の原「ふる里を燒野の
 はらとかへり見て末も煙
 の波路をぞゆく」(平清
 經)

挿繪 平家都落。
 春日驗記(高階隆兼筆)

かねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄す
 る波の音、袂にやどる月の影、すべて心を傷
 ましむるもののみなり。月の出で来る山の
 はをあなたの空とや思ひけん、日暮舳に立
 ちて笛吹く人あり。響は遠く煙波を掠めて、
 三軍均しく耳を欬つ。嗚呼、この時この人、懷
 ひ果して如何に。
 世にもあはれなるは平家とぞいふめる。
 げに此の一門の盛衰を考ふるに、心も詞も
 及びがたきなり。



笛吹く人 壽永二年十月平
 清經、月夜に笛を吹いて
 海に投ず。

二 清盛入道

一旦の榮華に耽りて、百年の計を思はず。今や秋の嵐のふ

き荒ばんずる朝も、春の夜の夢なほ臆にして、覺めての後は
さすがにうき世と觀ずれども、先世後代既に梭をかへたる
をいかにかすべき。今を昔にかへさんすべもかた絲の、より
くづれたる世こそ、かへすも是非なけれ。されば風雅に
かくれては、一題の遺詠に今生の本懐を終へ、恩愛にほださ
れては、己身の現在に來世の果報を思はず。あはれは桐の一
葉に散りそめて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば
怪しきまでに哀なりける運命かな。

さるにても、入道相國の生涯こそなかく、面白かりけ
れ。弓矢の勳はや畢んぬ。朝家の權柄今はた盛なり。一門殿上
にのぼりて六十餘人、私封全國に渡りて三十餘州、攝籙の家
は名のみにて、四海の成敗皆こゝに集れり。昔は殿上の交を
だに嫌はれし人、今はこの人ならでは人にあらじと唱へら

一題の遺詠に云々、平忠度
が俊成を訪れしことをさ
す。一題とは「さびなみや
志賀の都はあれにしを昔
ながらの山櫻哉」をさす。
恩愛に云々、平維盛が都に
留めし妻子を思ひて都戀
しの情にたへさりしこと
をさす。

一門 平時忠は「此の一門
にあらざらんものは皆人
非人たるべし」といへり。

れ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏之が爲に目
側だつるばかりなり。されば十善の帝王かしこくも外威の

威におされ給ひて、八幡・賀茂の御幸は、八重の潮路の嚴島と
ぞ觸れられける。何がしの卿が、入る日をも招き返さんずる
勢。」と書かれしも、げにことわりと覺ゆ。

不敵なる入道は、私門の榮に飽き足らで、世に人もなげに
振舞はれけるこそゆゝしけれ。こゝに卿相雲客、流離の難に
遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射
山の嵐をしのばせ給ふ。中にも重代の帝座俄に動きて、愛宕
の里のあはれを止めけるこそ、なかく、に淺ましかりしか。
咲きも残らず、散りも初めぬ櫻花、嵐なくとも斯くてやは已
むべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦
の直垂に萌黃匂の鎧着て、連錢葦毛の馬に金覆輪の鞍置か

京師の長吏云々、長根歌傳
に楊氏の勢力を叙して、
「京師長吏、爲之側目」
とあり。

八幡・賀茂云々、天皇御讓
位の後には石清水八幡・賀
茂神社・熊野神社に詣て
給ふ例なりしを、當時、清
盛の尊崇する嚴島神社に
御幸ありしことをいふ。

法皇の御身、治承三年、後
白河法皇を鳥羽殿に幽し
奉る。

射山 菟姑射の山。

愛宕の里、治承四年、福原
に遷都ありし時、内裏の
柱に書かれし歌、百年を
四かへりまでに過ぎ來に
しおたぎの里のあれやは
てなむ」

せたる容儀・帶佩こそあつばれ平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の水鳥に算を亂しし十萬餘騎は、徒らに長き世の笑を留めたるに過ぎず。加ふるに北土俄に雲亂れて木曾の山氣漸く都に逼り、兩山の衆徒また既に反覆の色を示しぬ。平家の運命日にますく急なり。

時しも入道は病にかゝりぬ。あはれ病の牀の寂しきに、霜夜の鐘の響の枕に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至る迄、六十四年の生涯を靜かに憶ひ出でたる時、而して命の際の身ぞと觀じたる時、彼果して如何の感慨を催しけん。一代の榮華身に餘りて、保平の勳また言ふに足らずと思はざりしか。己につらき人々をかくまでに惱まししことの罪深かりきとは思はざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしは、ては、軍兵を擁して法皇を幽閉し參らせしことの中にも非

太政入道の云々 清盛三十一歳にして安藝守に任じ六十四歳にて薨す。

道の所行なりしを思はざりしか。更に小松の内府が、身命にかへて乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆にうたゝ悔恨の心を動かすことなかりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事のきはに、今生の名利を棄てて未來の淨樂を欣求する一念を發することなかりしか。皆あらず。入道は死に至るまでその初念を翻すことなく、正にその生けるが如くにして死せしなり。

今はこの詞に曰く、兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこそ、かへすくも遺憾なれ。われ死したりとて佛事・孝養をもすべからず。堂塔をも建つべからず。いそぎ討手を下し、彼が首を刎ねて我が墓前に懸けよ。これぞ今生後生の孝養にてはあらんずる。」と。一念の執着に必衰の運命を物ともせず、三世の因

六慾 眼・耳・鼻・舌・身・意の六根の慾。

果を身に引くとも、なほ怨敵に報いんことを必せり。その事の可否は姑く措き、とまれかくまれ、丈夫たる心の強きは感ずべきなり。たとひ四海の波を翻して彼が頭にかくとも、尙この一我をいかにともすること能はざらん。六尺の眇軀ここに至れば天地の大にも比ぶべく、運命我に於て浮塵にひとしからん。所謂死して而して生ける者と謂ふべきか。

〔樗牛全集〕

今の文章の多くは偽文のみ。意誠語朴の眞に人を動かすもの極めて稀なり。嗚呼、希望といひ慰藉といふ、いづれも人生の最大事實なり。自らの血と涙とを以てこれを解釋したる人にして、初めてこれを口にするを得ん。文字は符號のみ之を註解するものは作者自らの生活ならざるべからず。文はこゝに至りて畢竟人なり、命なり、人生なり。ああ、今の時墨工、槩人の類にして、詩人と稱し、文學者と號するもの何ぞ一に多きや。(高山樗牛)

一五 方丈記抄

鴨 長 明

行く川のながれ

行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉敷の都の中に、棟を並べ、薨を争へる、尊き、卑しき人の住居は、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、僅かに一人二人なり。朝に死し、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

鴨 長明 通稱菊太夫。鎌倉時代の歌人。建保四年(一一七〇)歿、年六十四。

よどみ 水の流のとどまるところ。

かつ消えかつ結びて云々 「こゝに消えかしこに結ぶ水のあわのうき世にめぐる身にこそありけれ」 (藤原公任)

玉敷の「都」の枕詞。

「玉敷のつゆのうてなも時にあひて千世のはじめの秋は來にけり」 (新編古今集)

朝に死し云々

「朝有紅顔、誇世路、暮爲白骨、朽郊原。」 (和漢朗詠集)

知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。又知らず、假のやどり、誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を悦ばしむる。その主人と住家と無常を争ひ去るさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるは露おちて花残り。残るといへども朝日に枯れぬ。あるは花萎みて露なほ消えず。消えずといへども夕を待つことなし。

一期の月影

一も一、一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽ちに三途の闇にむかはむ時、何の業をかかこたむとする。佛の人ををしへ給ふ趣は、ことにふれて執心なかれとなり。いま草の庵を愛するもとがとす。閑寂に著するも障なるべし。いかゞ用なき樂びをのべて、空しくあたらし時を過ぐさむ。靜かなる

朝顔の露云々

「何かおもふなにかはなげく世の中はたゞ朝顔の花の上の露」(新古今集)

一期の月影云々

「ながむれば月かたぶきぬあはれ我がこの世の程もかばかりぞかし」(後拾遺集)

餘算 餘命

三途(火途・地獄道)・刀途(餓鬼道)・血途(畜生道)

曉、この理を思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて山林にまじはるは、心を修めて道を行はむが爲なり。然るを、汝が姿は聖に似て、心は濁にしめり。住家はすなはち淨名居士の跡をけがせりといへども、たもつ所はわづかに周梨槃特が行にだも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづからなやますか、はた又妄心のいたりて狂はせるか。その時、心更に答ふる事なし。たゞ傍に舌根をやとひて、不請の念佛兩三返を申してやみぬ。

上方丈記

石川やせみの小川の清ければ月もながれを尋ねてぞすむ

(鴨 長明)

淨名居士 維摩詰のこと。釋迦と同時代の人。方丈の室に住めり。
周梨槃特 釋迦の弟子中第一の愚鈍者。

方丈記 一卷。鴨長明の隨筆。文章精練、理路整然、隨筆文學史の上に重要な位置を占む。

一六 物ぐさ太郎

東山道みちのくの末、信濃のくに十郡のその内に、つるまの郡あたらしの郷といふところに、不思議のをのこ一人侍りけり。其の名を物ぐさ太郎ひぢかすと申し候。名を物ぐさ太郎と申すことは、國にならびなき程の物ぐさなり。但し名こそ物ぐさ太郎と申せども、家づくりのありさま、人にすぐれてめでたくぞ侍りける。四面四町に築地をつき、三方に門を立て、東西南北に池を掘り、島を築き、松、すぎを植ゑ、島より陸地へそりはしをかけ、高欄にぎぼうしを磨き、まことに結構世にこえたり。十二間のとほざぶらひ、九間のわたり廊下、釣殿、ほそどの梅壺、きりつぼ、籬が壺にいたるまで、百種の花をうゑ、しゆでん十二間につくり、檜皮葺に葺かせ、にしきを

東山道 我が國の八道の一。東海・北陸兩道の間に夾り、畿内（京都の周圍の地方）より東方山間の諸國を連れて、奥羽地方に至るもの。
つるまの郡あたらしの郷 假設の地名。

梅壺・きりつぼ（桐壺）籬が壺 何れも、中庭の名稱。
しゆでん 主殿。寢殿のこと。

もつて天井を張り、けたうつばりたる木のくみ入れには、しるがね、こがねを金物にうち、瓔珞のみすをかけ、うまやさぶらひ所にいたるまで、ゆゝしく作り立てて居ばやと、こゝろには思へども、いろ／＼こと足らねば、たゞ竹を四本たて、薦をかけてぞゐたりける。あめの降るにも日の照るにも、習はぬすまひしてゐたり。かやうに作りわろしとは申せども、あし手のあかぢりのみ、しらみ、ひぢの苔にいたるまで、足らはずといふことなし。もとでなければ、あきなひせず、物をつくらねば、食物なし。四五日のうちにも起きあがらず、ふせりゐたりけり。

ある時、なさけある人の、もとあいきやうのもちひを五つ、いかにひだるかるらむとて得させければ、たまさかに待ち得たることなれば、四つをば一度に喰ひ侍り。いま一つを心

あかぢり あかぎれ。

もとあいきやうのもちひ 神佛に供へたる餅。

におもひけるやうは、ありと思ひて喰はねば、のちの頼みあり、無しと思へばひだるくなけれど、たのみなし、まぼらえてあるも頼みなり、いつまでも人の物を得させむまでは、もたばやと思ひて、寝ながら胸のうへにてあそばかして、鼻あぶらをひきて、口にぬらし、頭にいたゞきとりあそぶ程に、とりすべらかし、大道までぞころびける。その時、物ぐさ太郎見わたして思ふやう、取りに行きかへらむも物ぐさし、いつの頃にも、人の通らぬことはあらずと、竹のさを捧げて、犬からすのよるを追ひのけて、三日まで待つに人見えぬ。三日と申すに、たゞの人にはあらず、そのところの地頭あたらしの左衛門の尉のぶよりといふ人、小鷹狩にまじろの鷹をすゑさせて、その勢五六十騎にて通りたまふ。物ぐさ太郎これを見て、鎌首もちあげて、なう申し候はむ。それにもちひの候。

まぼらえてある 見守つて
あること。

小鷹狩 秋の鷹狩。

取りてたび候へ。」と申しけれども、耳にも聞き入れず、うち通



りけり。物ぐさ太郎これを見て、世間にあれほど物ぐさき人の、いかにして所知所領をしるらむ、あのもちひを馬よりおりて、取りてつたへむほどのことは、いとやすき事、世の中に物ぐさきもの、われ一人とおもへば、多くありけるよと、「あらうたての殿や。」とて、斜ならずつぶやき、腹をぞ立てにける。兵衛尉、あらしきひとならば腹をも立て、いか様にもあたり給ふべきに、馬をひかへてこれを聞き、「きやつめが事が、聞ゆる物ぐさ太郎といふ者は。」さん候。二人と

挿繪 古本挿繪。

も候はばこそ。これが事にて候。さておのれはいかやうにして過ぐるぞ。さん候。人の物をくれ候ときは、何をもたぶる。くれ候はぬときは、四五日も十日ばかりも、たゞむなしく過ぎ候。と申しければ、さては、ふびんの次第かないのち助かる仕度をせよ。一樹の蔭にやどるとも、一河のながれを汲むとも、他生の縁となる。所こそ多きに、わが所領の内にもうまれあふ事、前世の宿縁なり。地をつくりて過ぎよ。とありければ、もち候はず。と申す。さらば取らせむ。とあり。物ぐさく候程に、地もほしからず候。と申せば、あきなひをして過ぎよ。とあれば、もとの候はず。と申す。取らせむ。とありければ、今更ならばぬこと知らぬこと、成りがたく候。と申せば、さてはかゝるくせ者かないでさらば、助かるやうにせむ。とて、すゞりを取りよせて札を書きて、わが領内をまはす。此の物ぐさ太郎に毎日三

これが事云々 私のことと
ございます。

合飯を二度くはせ、酒を一度のますべし。さなからむものは、わが領にはかなふべからず。とふれられけり。まことに實に、これぞあはぬは君の仰せかなとはおもへども、かくの如くある程に、三年ぞ養ひける。

（お伽草子）

化物草子

九條わたりに、荒れたる家にかすかにて住す女ありけり。人のもとよりかち栗をおこせたりけるを喰ひ居たるに、向ひたる炭櫃のあるより白々としたる手を出して、乞ふやうにしければ、いと不思議なれども、手のいたいけしたる程に、さまで恐ろしきこちもせで、一つ取らせたりければ、引入れて、又さし出しし出し乞ひければ、度毎に一つづつ取らせて、四五度して後見えざりけり。不思議に覺えて、つとめてその下を見ければ、杓子といふものの白く小さきおちはさまりてありける。とらせし栗も、さながらそばにありける。いと不思議なりけり。

（化物草子）

あはぬ 理窟にあはぬ。
お伽草子 二十三篇。中古
以来の草子物（よみもの）
か集む。

一七 大晦日は合はぬ算用 井原西鶴

榎乾栗・神の松やま草の賣聲も忙しく、餅搗く宿の隣に煤をも拂はず、二十八日まで髭も剃らず、朱鞆の反をかへして、「春まで待てといふに、是非に待たぬか」と米屋の若い者を睨みつけて、直なる世を横に渡る男あり。名は原田内助と申し、かくれもなき浪人、廣き江戸にさへ住みかね、この四五年、品川の藤茶屋の邊に店借りて、朝の薪に事を缺き、夕の油火をも見ず、これは悲しき年の暮に、女房の兄半井清庵と申して、神田明神の横町に醫師あり。この許へ無心の状を遣しけるに、度々迷惑ながら見捨て難く、金子十兩包みて、上書に「貧病の妙藥金用丸萬に良し」と記して、内儀の方へ送られけり。内助喜び、日頃別して語る浪人影間へ、酒一つ盛らんと呼び

井原西鶴 大阪の人。俳人。小説作家。元禄六年(三三三)歿、年五十二。
やま草 裏白のこと。

品川 昔の東海道江戸の入
口。今東京市品川區。

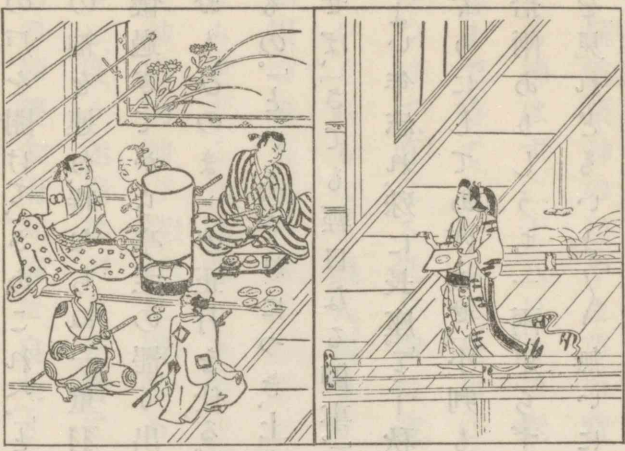
神田明神 東京市神田區に
あり。大巳貴命を祀る。

に遣はし、さいはひ雪の夜の面白さ、今までは崩れ次第の柴の戸を開けて、「さあこれへ」といふ。以上七人の客、何れも紙子の袖を連れ、時ならぬ一重羽織、どこやら昔を忘れず、常の禮儀過ぎてから亭主の罷り出て、「私しあはせの合力を請けて、おもひのまゝの正月を仕る」と申せば、各々「それはあやかりもの」といふ。それにつき、上書に「一作あり」と件の小判を出せば、「さても輕口なる御事」と見てまはせば、盃も數重りて、「よい年忘れ、殊に長座」と千秋樂を謳ひ出し、爛鍋・鹽辛壺を手ぐりにしてあげさせ、小判も先づ御しまひ候へ」と集むるに、拾兩ありしうち一兩足らず。座中居直り袖などふるひ、前後を見れどもいよく、無いにきはまりける。主人の申すは、「その内一兩は、さる方へ拂ひしに、拙者の覚え違ひ」といふ。只今までたしか十兩見えしに、めいようの事ぞかし。兎角は銘々

以上七人 總計七人。

めいよう 奇妙不思議の
意。

の身晴れ。」と、上座から帯を解けば、その次も検めける。三人めにありし男、澁面つくりて物をも言はざりしが、膝立て直し、



「浮世には、かゝる難儀もあるものかな。それがしは身を掉ふまでもなし、金子一兩持ち合はすこそ因果なれ。思ひも寄らぬ事に一命を棄つる。」と思ひ切つて申せば、一座口を揃へて、「こなたに限らず、淺ましき身なればとて、小判一兩持つまじきものにもあらず。」と申す。如何にもこの金子の出所は、私持ち來りたる

挿繪 原本挿圖。

以上十八 後藤氏。金工の名人。

紛れはなけれども、折節悪し。常々語り合はせたる誼には、生害に及びし後にて御尋ね遊ばし、戸の恥をせめては頼む。」と申しもあへず、革柄に手を懸くる時、小判はこれにあり。」と、丸行燈の陰より投げ出せば、「扱は。」と事を鎮め、「ものには念を入れたるがよい。」といふ時、内證より内儀聲を立て、「小判は此方へ參つた。」と、重箱の蓋に着けて座敷へ出されける。これは、宵に山の芋の煮染物を入れて出されしが、その湯氣にて取り着きける、さもあるべし。これでは小判十一兩になりける。何れも申されしは、「この金子、ひたもの數多くなること、めでしたし。」といふ。亭主申すは、「九兩の小判十兩の詮議するに、十一兩になること、座中金子を持ち合はせられ、最前の難儀を救はんために御出しありしは疑ひなし。この一兩我が方に納むべきやうなし。御主に返したし。」と聞くに、誰返事の上しても

なく、一座異なものとなりて、夜更け鶏も鳴く時なれども、各立ち兼ねられしに、「この上は、亭主が所存のとほりに遊ばされてたまはれ。」と願ひしに、「兎角あるじの心まかせに。」と申されければ、彼の小判を一升楯に入れて庭の手水鉢の上に置きて、「どなたにてもこの金子の主取らせられて御歸りたまはれ。」と、御客一人づつ立たしまして、一度一度に戸をさしこめて、七人を七度に出して、その後内助は手燭ともして見るに、誰とも知れず取つて歸りぬ。あるじ即座の分別、座馴れたる客のしこなし、彼是、武士のつきあひ格別ぞかし。
上天下馬下

一八 新

幸田露伴

去年は昨夜に盡きて、今歳は今曉に生じぬ。青天は猶舊に依つて高く、紅日は猶舊に依つて圓かれども、春衣は既に新を迎へて鮮かに、椒酒は既に新を迎へて芳ばし。乾坤未だ忽ちに變ぜざるも、意氣おのづから頓に爽かに、初東風渡る注連繩の戦ぎに神代の聲を聞いて、水晶嫩くして凝らぬ若水の清きに魂魄の汚を濯へば、人誰か毅然として大に奮ひ、斬然として自ら新にせんと欲はざらん。胸凍り腸結ぼるる悪夢の數々に、魔え縮みしは、疇昔の昏き夜半。膽張り心燃ゆる希望の念々に、勇み立つは、現在の美しき朝ぼらけ。初空にさし出す獅子の兩の眼、金光燦として對ふ所を射るは、年の首の男心、千里に横行して百獸を威伏せんとするにも似たら

幸田露伴 名は成行。慶應三年東京市に生る。文學博士。帝國學士院會員。

ずや。君が八千代の松飾、直なる竹の立ちて添ふ萱が檐端に、
 鶏の聲の澄みて亮りてやさしきは陸月の初の女氣のたゞ
 和かに莞爾やかに、天衢に讚歎の歌の響を奉りて人間に靈
 奇なる惠の光を齎らさんとするにも近からずや。眼は遠き
 を見よ、千里を思ふものは百里に疲れず。歌は高きに獻げよ、
 上方に聞ゆる時かつ八方に傳はらん。人あり、こゝに生命あ
 り。生命あり、こゝに生命の前途あり。眼を擧ぐれば遠くして
 又遠く、我が前に在る路長うして盡きず。人あり、こゝに情思
 あり。情思あり、こゝに情思の行方あり。歌を發てば遙にして
 又遙に、我が上に在る天、杳にして究なし。たゞ不盡の路を馳
 せて、無窮の天に向ふ。路を馳せずんば、生命ありて生命あり
 とするに足らず。天に向はずんば、情思ありて情思ありとす
 るに足らず。昨日も歩み、去年も歌ひぬ。知らず、如何なる道を

新十、新十、新十、新十、
 三、三、三、三、三、三、
 四、四、四、四、四、四、
 五、五、五、五、五、五、

如何に歩みて、如何なる歌を如何に唱ひしを。昨日は去りつ、
 去年は過ぎたり。腦後の山水は觀るに値せず。耳外の詞曲は
 聽くに由なし。よし、逝くものを流水に委ねて、起つものを烈
 火に擬へなん。新、新、新、新、新、新、新、新、新、新、
 日ぞや、第一歩を踏め、第一聲を放て。希望の駒は既に嘶えて、
 希望の筥篋は既に張られぬ。いで、いざ、いざ、いざ、

〔洗心録〕

徳若に 御萬歳と 御代も榮えまします 愛敬あり
 ける新たまの としたちかへるあしたより 水もわか
 やぎ 木の芽も咲き榮えけるは まことにめでたうさ
 ふらひける

(萬歳ことば)

新十、新十、新十、新十、
 三、三、三、三、三、三、
 四、四、四、四、四、四、
 五、五、五、五、五、五、

一九 玉勝間抄

本居 宣長

近き世學問の道開けて、大かた萬づのとりまかなひさとく、賢くなりぬるから、とりづくに新たなる説を出す人多く、その説よろしければ世にもてはやさるゝによりて、なべての學者いまだよくも整はぬほどより、われ劣らじと、世に異なる珍らしき説を出して、人の耳を驚かすこと、今の世のなからひなり。その中には、随分によろしきことも稀には出でくめれど、大方いまだしき學者の、心はやりていひ出づることは、たゞ人にまさらむ、勝たむの心にて、かるくしく前後をもよく考へ合はさず、思ひよれる儘に打出づる故に、多くはなか／＼なるいみじき僻事のみなり。すべて新たなる説を出すはいと大事なり。いくたびもか

本居宣長 國學四大人の一
伊勢の人。鈴の屋と號す。
紀伊侯に仕ふ。享知元年
(二四六一)歿、年七十二。

へさひ思ひて、よく確なるよりどころをとらへ、いづくまでもゆき通りて、たがふところなく、動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時には、うけばりてよしと思ふも、ほど經て後に今一たびよく思へば、なほわろかりけりと、我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

おのれ古典を解くに、師の説とたがへる事多く、師の説のわろきことあるをば、わきまへいふ事も多かるを、いとあるまじき事と思ふ人多かめれど、これ即ちわが師の心にて、常に教へられしは、後によき考への出できたらむには、必ずしも師の説にたがふとてな憚りそ。となむ教へられし。こはいとたふとき教にて、わが師のよにすぐれ給へる一つなり。大かた古を考ふること、さらに一人二人の力もて、悉くあ

わが師 賀茂真淵。

きらめつくすべくもならず、又よき人の説ならむからに、多くの中には誤もなかなからむ。必ずわろき事もまじらではえあらず。そのおのが心には、今は古の心悉く明かなり、こ



れをおきてはあるべくもあらずとおもひ定めたることも、おもひの外に又人のこと

なるよき考へも出でくるわざなり。あまたの手を経るまにまに、さきづの考へのうへをなほよく考へきはむるからに、つぎ／＼に詳しくなりもて行くわざなれば、師の説なりとて、かならず泥み守るべきにもあらず。よきあしきをいはず、ひたぶるに舊きを守るは、學問の道にはいふかひなきわざなり。思ひすし／＼

挿繪 本居宣長自畫像。
敷しまのやまと心を人と
はば朝日にほふ山ざく
らばな 宣長

又おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いとも畏くはあれど、それもいざれば、世の學者その説に惑ひて、長くよきを知る期なし。師の説なりとして、わろきを知りながらいはず、包みかくして、よさまにつくろひをらむは、たゞ師をのみ尊みて、道をば思はざるなり。宣長は、道を尊み、古を思ひて、ひたぶるに道の明かならむことを思ひ、古の意の明かならむことをむねと思ふが故に、私に師を尊むことわりの缺けむことをば、えしも願みざることあるを、なほわろしと譏らむ人は、譏りてよ。そは詮方なし。われは人に譏られじ、よき人にならむとて、道をまげ、古の意をまげて、さてあるわざはえせずなむ。これ即ちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ、吾にしたがひて物學ばむ輩も、わが後

に又よき考へのいできたらむには、必ずわが説にな泥みそ。わがあしき故をいひて、よき考へをひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明かにせむとなれば、かにもかくにも、道を明かにせむぞ、吾を用うるには有りける。道を思はで、徒らにわれを尊まむはわが心にあらざるぞかし。

物學ぶともがら、物知り人にあひて物問ふに、ともすれば、まづ古書の中にも、よに難き事として、誰も説き得ぬふしをえり出でて問ふならひなり。難きことをまづ明らめまほしく思ふも、學者のなべての心なれども、然らば易き事どもは皆よく明らめ知れるかと試むれば、いと易き事どもをだに、未だえよくもわきまへず。さるものの、さし越えてまづ難きふしを明らめむとするは、いとあぢきなきわざなり。よく聞

えたりと思ひて、心もとづめぬことに、思ひの外なる僻心得の多かるものなれば、まづたやすき事を幾度もかへさひ考へ、問ひも明らめて、よく得たらむ後にこそ、難きふしをば思ひかくべきわざなれ。

よろづよりも、手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ、學問などする人は、ことに手悪しくては心おとりのせらるゝを、それ何かは苦しからむといふも、一わたりことわりはさることながら、なほあかずうちあはぬ心地ぞするや。

宣長いと拙くて、常に筆とるたびに、いと口惜しういふかひなくおぼゆるを、人の請ふまゝに、面なく短冊一ひらなどかき出でて見るにも、我ながらにいとかたはに見苦しう、かたくななるを、人いかに見るらむと、恥かしく胸痛くて、若か

りしほどになどて手習はせざりけむと、いみじうくやしく
なむ。出づる言は、ことごとく、其の言は、ことごとく、其の言は、
言葉のみにもあらず、よろづのしわざにも、片田舎には、い
にしへさまのみやびたることの残れるたぐひ多し。葬禮・婚
禮など、ことに田舎には古くおもしろきこと多し。すべてか
かるたぐひの事どもをも、國々のやうを、海づら山がくれの
里々まで、あまねく尋ね、聞きあつめて、物にもしるしおかま
ほしきわざなり。はふりまつりなどのわざ、後の世の物知り
人の考へ定めたるは、なかく、にからごころのさかしらの
み多くまじりて、ふさはしからず、うるさし。玉勝問抄

玉勝問 十五卷。本居宣長
の隨筆。

二〇 批評論

大西祝

一、創作と批評

名評の得難き、殆ど名作の得難きに下らず。ハムレットを
評する者ゲーテの如きあり。其の批評の至妙なる、マコーレ
ーをして嘆美と絶望とに餘念なからしめたり。然れどもシ
エイクスピアのゲーテを得る迄は、殆ど二百年を經過せり。
夫れ文學及び美術上の創作は、主として構成の作用に屬す。
理解の慧眼を以て其の構成の妙處を穿つは、これ批評家の
本領とする所なり。
批評家と作家とは頗る其の才能の趣を異にするを以
て、一人にして此の兩者の極處に達するは、殆ど望む可から
ざるの難事なり。古來此の兩種の才能を兼ね具したる者に

大西祝 文學博士。操山と
號す。明治三十三年歿。
年三十六。

ハムレット シエイクスピ
アの悲劇。"Hamlet"
ゲーテ Goethe (1749—
1832) 獨逸の詩人・戯曲
作者。
マコーレー Thomas
Babington Macaulay.
イギリスの歴史家・政治
家 (1800—1859)
シェイクスピア Shakes-
peare (1564—1616) 英
國の劇詩人。

して、ゲーテ若しくはレッシングの如きは至つて稀なり。彼のバイロンの詩を賦するや、其の音調の爽快なる、其の詞句の有力なる、恰も一種魔術に似たりと雖も、一旦心を潜めて詩文の批評を爲さんとするに當つては、其の言ふこと極めて拙なり。彼の歌ふや天使に似たり。其の考ふるや三歳の童子に等し。夫れ詩才動くが故に詩人歌ふ。然れども必ずしも自ら其の由つて來る所を知らざるなり。詩人は能く美妙を直覺す。之を理解する者は批評家なり。詩人は恰も神明に通ずる者の如く、自ら其の理を解せずして、よく天地の美妙を開き、よく其の眞理を穿つ。詩人の爲に其の理を解する者は批評家なり。詩人は美妙を執つて之を其の作中に宿らしむ。彼固より作中の美妙を知る。然れども必ずしも其の美たる所以を解釋し得るにあらず。之を解釋する者は批評家なり。

レッシング
Gotthold Ephraim
Lessing. ユーテンの詩人、
批評家。(1729—1781)
バイロン George Gordon
Byron. イギリスの詩人。
(1788—1824)

然らば則ち詩人は天然を解する者、批評家は詩人を解する者と謂ひて可なり。此の詩人と其の批評家との關係は、之を推さば、以て概ね自餘の創作家と其の批評家との關係を知るに足らん。

されば批評家は創作家の爲に殿となるの位地にあれども、亦よく之が先驅となるの榮譽を負へり。蓋し名評は名作の後に、出づるのみならず、又よく未來の名作を誘引するの力あり。批評は常に往時を顧みるに止らず、又將來を指揮するの力あり。批評家は己自ら創作せずと雖も、後世の創作家を教へて望ある行路を取らしむることを得。且夫れ文學史上、創作の時代と批評の時代とは、頗る其の趣を異にする所あるを以て、一國の文學若し批評の時代にある時は、創作は敢へて望む可からず。寧ろ之が爲に準備を爲すべし。創作の

時代は招いて直ちに來る者にあらず。其の來るや深く國家
 百般の情況に因縁す。彼のエリザベス時代の英國文學に於ける、又彼のゲーテ
 シルレル時代の獨逸文學に於ける、其の例古來幾何かある。
 斯くの如き創作時代の因となり縁となる者、固より一にし
 て足らずと雖も、一般の國民、新鮮の思想を呼吸し、活潑なる
 精神的運動を始むるに於ては、其の國の文學、望むらくは創
 作の時代に近からん。此の時に當り、社會に飛奔する種々雜
 多の思想を判別批評して、其の眞價を明かにし、以て當時の
 思想界に先だつ者は、蓋し批評家なり。此の時に當り、草を刈
 り土を反し種子を下して、以て將來の文華を招き來す者は、
 蓋し批評家なり。將に來らんとする文華の遲速と、其の情態
 とは、大いに之に先だつ所の批評如何に關係す。兩者の相關

シルレル Johann Chri-
 stoph. Friedrich Von
 Schiller. ゲーテと並び
 稱せられたドイツの劇詩
 人。(1759—1805)

する所太だ親密なるを知るべし。

批評の職分

批評の創作に關する所の如何を知れば、其の職分は從つ
 て推知し得らるべし。其の職分は他なし、在る物を在りの儘
 に見ること。是なり。此の事たる、至つて爲し易きが如く見ゆ
 べけれども、一たび深く其の事の眞に何たるかを考ふれば、
 其の極めて難事なるを認識し得べし。蓋し事物を創作する
 には一種の才能を要する如く、其の創作の眞相を觀るにも、
 亦一種の才能なかる可からず。事物の相を認識するは、恰も
 鏡面の物象を受くるが如く、曇なく凹凸なき者にして始め
 て其の眞相を寫し得べく、智力の發達圓滿、心情の感應宏寬
 なる者にして始めて其の眞相を認識し得べし。且又事物の
 眞相は屢、其の表面に出現せず、寧ろ其の内部に埋伏するが

故に、慧眼を有するにあらずば之を發見する能はず。其の眼孔は事物の全面に亙ると共に、其の根柢に達せざる可からず。されば批評家が文學上の創作を品評し、其の真相を明かにし、其の妙處を穿つは、實に爲し難きことと謂ひつべし。然らば則ち批評家は、如何の作用によりて文學的創作の真相を發見し得るか。今其の作用を分析して二段となし得べし。第一、創作家と同感となること、第二、創作家の著作を我が有する所の最高の標準に照らすこと、是なり。人常に曰ふ、批評は須らく局外の人に委託すべしと。蓋し其の局に當る者は、動もすれば事の一方に執著して公平の判断を失ふことあればなり。然れどもこれ唯眞理の半ばをいへるに過ぎず。何となれば、當局者にあらざるよりは其の事の内實隱微の邊に通じ難く、従つて皮相の見解を下すこと多ければなり。

り。されば批評家たる者は先づ身を創作家の位地に置き、其の考を自ら更に考へ、其の感覺を自ら更に感覺し、全く彼と同感となり、云はば一旦は彼創作家と變ぜざる可からず。此の如くにして始めて其の思想と感情との祕密の邊を探り得て、毫も遺憾なきに到るべし。然れども一度身を創作家の位地に置きし上は、また翼を撃つて理想の土地に上り、最高の標準に照らして、其の創作家の著作に絶對的の批評を下さざる可からず。即ち一度は近づき、一度は遠ざかり、一度は親友、一度は他人とならざる可からず。大自在の心なき者豈これを爲し得んや。啻に心の自在なるのみならず、非凡の智力と感應の力とを具ふる者にあらざれば、文學上最高の標準を發見し、且廣く創作家に對して共鳴すること能はざるなり。

三、批評の範圍

上來論じたる所は専ら文學の批評に關すれども、批評なるものは廣く之を解すれば、獨り文學に限るにあらず。美術には美術の批評あり、哲學には哲學の批評あり、創作のある所、批評あらざるなし。且夫れ歴史は一種の批評に外ならず。或は國家の歴史、或は文學の歴史、或は學術の歴史、皆これ既往の事實を批評する者と謂ひて可なり。將に社會に流布せんとする思想あるか、爰に最も缺く可からざるは之が批評なり。其の思想にして若し眞實の價值あらば、宜しく之に印して思想界の貨幣となすべし。而して之に印する者は即ち批評なり。且夫れ批評の職分は、其の批評を下す所の事件に隨ひて多少其の趣を異にすべければ、文學的著作の批評家と、哲學若しくは學術的著作の批評家とは、其の間自ら差別

ありと雖も、其の批評家たるの大體に於ては、上來論じたる所と概ね相違ふことなかるべし。
——大西博士全集——

一般の人が、今の時世を正しく判斷し、それから文明の程度が何の邊にあるかといふことなどを考へ得ると云ふやうなところまで進み、又個人としては自己の周圍を見あやまることなく、自分の行くべき道を知る力を養つてもらひたいと思ふ。人は眞の批評に導かれて始めて自己を發見し、幾多の性格と精神とを知り、偏見を捨てて正しく進むことが出来る。そこに生の發展ともいふべきものがあると思ふ。
(島崎藤村)

島崎藤村 名は春樹。明治五年生。文學者。

二 梅 花

豊島與志雄

梅花の感じは、氣品の感じである。
 氣品は一の芳香である。眼にも見えず、耳にも聞えない、或
 風格から發する香である。甘くも酸くも辛くもなく、それら
 のあらゆる刺戟を超越した、得もいへぬ香である。人をして
 思はず鼻孔をふくらませる、無味無臭の香である。それと明
 かに捉へ得ないが、それと明かに感じ識らるる、一種獨得の
 香である。何處からともなく、何故にともなく、何處へともな
 く、自からに發散して漂つてゐる、浮遊の香である。

それはまた、梅花の香である。薄らと霧立こめた未明の微
 光に、或は淋しい冬日の明るみに、或は佗びしい夕の靄に、或
 は冷々とした夜氣に、仄かに織り込まれて、捉へ難く觸れ難
 く、たゞ脈々と漂うてゐる、一種獨得の梅花の香は、俗塵を絶
 した氣品の香である。その香を感じてその花を求むるは、俗
 であり愚である。花のありかを求めずに、漂ひ來る芳香に心
 を澄す時、人は氣品の本體を識るであらう。
 氣品はまた、一の凜乎たる氣魄である。衆に媚びず、孤獨を
 恐れず、自己の力によつて自ら立ち、驕らず卑下せず、霜雪の
 寒さにも自若として、己自身に微笑みかくる、搖ぎなき氣魄
 である。肥大ならず、矮小ならず、膨脹せず、萎縮せず、賑はしか
 らず、淋しからず、たゞあるがまゝに満ち足つて、空疎を知ら
 ず、漲溢を知らず、恐るゝことなく、蔑むことなき、清爽たる氣
 魄である。
 それはまた、梅花の氣魄である。霜雪の寒さを凌ぎ、自らの
 力で花を開き、春に魁けして微笑み、しかも驕ることなく、卑

豊島與志雄 明治二十三
 年、福岡縣に生る。佛文
 學者。東京帝國大學講師。

下することなく、爛漫たる賑がさもなく、荒涼たる淋しさもなく、たゞ靜かに己の分を守つて、寒空に芳香を漂はしてゐる姿は、まさに氣品そのものの氣魄である。しみじみと梅花に見入る時、恐怖や蔑視や悲哀や歡喜など、凡て心を亂すが如き情は靜まつて、たゞ氣高き氣品の氣魄に、人は自ら打たれるであらう。

氣品はそれ自身の性質からして、清淨なる白色たるべきである。赤や青や黄や紫など、何等かの色に染められた氣品は、世に存しない。固より、赤や青や黄や紫など、さういふ色彩が持ち得る氣品はあるけれども、氣品そのものの色はどこまでも白色である。然し單に白色のみでは足りない。純白の氣分を破らない程度に於て、何等かの點彩を要する。鮮かなる一點の色彩を包んだ純白、それが氣品の色である。

この氣品の色はまた、梅花の色に見らる。黎明や薄暮の微光の中に浮き出す、ほの赤きまでの白色、白晝の外光や深夜の闇の中に浮き出す、ほの蒼きまでの白色、または月光に輝らし出さるゝ薄紫にまがふまでの白色、その白色の花瓣の中に、花粉の黄を小さく點出した色彩は、氣品そのものの色彩である。それに瞳を凝らす時、人は自ら心清々しくなつて、氣品の妙趣を悟るであらう。

氣品には一の滋味があり、而も同時に一つの新鮮味がある。氣品は舊守でもなく、また新奇でもない。純粹の氣品は、骨董と新考案とを包含し、兩者を調和したものである。老と若と舊と新とをよせ集めて、而もその何れでもなく、老と舊との滋味を取り、若と新との新鮮味を取り來つた、一種恒久的なものである。古さから來る佶屈聳牙と、新しさから來る自

清らかな色彩に成り、餘りに妙味ある樹に咲くが故に、人間離れのした感じを以て人を卻けがちである。然しながら、梅花に瞳を定めてその香に心を澄すことは、必ずしも詩人にとつてばかりではなく、普通の吾々にとつてもよい。なぜなればそれは、地上の息吹きに天上の息吹きを交へることだからである。新たな心を以て梅花に接し、新たな心を以て梅花に親しむことは、梅花に人間味が少ないが故に益、梅花が天上的であるが故に益、人間にとつてよいのである。

この意味に於て、眞に梅花を觀るには、雑沓の巷や、ひろい梅林や、人工的な盆栽や、または月明の夜などよりも寧ろ、自由な清々とした境地に於てがよい。必ずしも美景を要しないが、たゞ自然の風趣の害せられておない、のびやかな環境の中に、一本の老木が、自然のまゝの枝振りに、ほつり／＼と

花をつけ、仄かな香を漂はしてゐるのを、少し冷かな二月の夜明け、薄霧の晴れやらぬ頃、爽かな空気を吸ひ、小さな霜柱を踏みしだいて、ふと氣付いたまゝ、何氣なく足を止めて、しみじみと見入り嗅ぎ入る心持、それこそ眞に梅花を觀るの境地である。その一本の老樹のたゞずまひと、その清らかな花の姿と、その脈々たる香と、その清冷な早朝の空氣とは、ただ一つ梅花の氣品となつて、人の心にしみ通るであらう。それをも卑俗と云ふものは、卑俗のみを知つて高潔を知らぬ徒輩である。

〔旅人の言〕

疎影横斜 水清淺、
暗香浮動 月黃昏。 (林 和靖)

二三 鉢の木

人物

シテ後シテ 佐野常世 後ワキ 最明寺時頼

ツレ 同 妻 ワキツレ 時頼の近侍

ワキ 旅僧最明寺時頼 狂言 從者

所

前段 上野國佐野 後段 相模國鎌倉

時

鎌倉中期 前段は十二月

ワキ次第「行方定めぬ道なれば、來し方もいづくならまし。」

ワキ「これは一處不住の沙門にて候。われこの程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづこの度は鎌

倉に上り、春になり修行に出でばやと思ひ候。

ワキ道行「信濃なる、淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐

の大井山、捨つる身になき伴の里、今ぞ浮世を離坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡りに着きにけり。

ワキ「急ぎ候ほどに、上野の國佐野の渡りに着きて候。あら笑止や、また雪の降り來りて候。此の所に宿を借らばやと思ひ候。

「いかに此の屋の内へ案内申し候。

ツレ「誰にてわたり候ぞ。」

ワキ「これは修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ。」

ツレ「易き御事にて候へども、主の御留守にて候ほどに、お宿は叶ひ候まじ。」

ワキ「さらば御歸りまで是に待ち申さうずるにて候。」

「印は語る部分。詞といふ。」

「印は語る部分。」

次第 序歌ともいふべきものは、一曲の氣分情調を表はす。

道行 叙景抒情を加へつゝ、旅程を述ぶる歌詞。

歌 詠ぶ部分の一種。上音に始まるを上歌、下音に始まるを下歌といふ。

クセ 曲舞節にて詠ぶ部分。

ロンギ 僧家の論議より出て、問答の體をなす部分。

地 役者以外の數人（地方）合唱する部分。

信濃なる云々 伊勢物語に「信濃なる淺間の嶽に立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ」と。

大井山 信濃國（長野縣）北佐久郡大井庄。

伴の里 同郡伴の庄。

離坂 同郡香掛と輕井澤との中間にあり。

碓氷川 碓氷峠より出て、上野國の烏川に入る。

板鼻 上野國（群馬縣）碓氷郡板鼻町。高崎市の西八

村。高崎市の東南十二軒。

佐野 上野國群馬郡佐野

村。高崎市の東南十二軒。

ツレ「それはともかくもにて候。わらはは外面へ出でむかひ、此の由を申さばやと思ひ候。

シテ「あゝ降つたる雪かな。いかに世にある人の面白う候らん。それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氈を着て立つて徘徊すといへり。されば今ふる雪も、もと見し雪に變らねども、われは鶴氈を着て立つて徘徊すべき袂も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥の、けふの寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。

「あら思ひ寄らずや、この大雪に何とて是に佇みて御入り候ぞ。木川下野の對岸を對面して、雪の音もこりしツレ「さん候。修行者の御入り候が、一夜のお宿と仰せ候ほどに、御留守の由申して候へば、御歸りまで御待ちあらうずるよし仰せ候ほどに、是まで参りて候。

雪は鵝毛に云々 和漢朗詠集に「雪似鵝毛一飛散亂、人被鶴氈、立徘徊。白樂天」と。

細布衣 陸奥の希婦(ケフ)の里の名産。

けふ 陸奥の地名「希婦」(所在不明)に「今日」を懸けていふ。

シテ「さてその修行者はいづくに渡り候ぞ。申さずとも申ツレ「あれに御入り候。

我降のたる雪か、いかに世にあ

人の面白う候らん。それ雪は鵝

毛に似て、飛んで、人の鶴氈

を着て立つて徘徊すといへり。

されば今ふる雪も、もと見し雪

に變らねども、われは鶴氈を着

て立つて徘徊すといへり。されば

今ふる雪も、もと見し雪に變ら

ねども、われは鶴氈を着て立つ

て徘徊すといへり。されば今ふる

雪も、もと見し雪に變らねども、

われは鶴氈を着て立つて徘徊す

といへり。されば今ふる雪も、も

と見し雪に變らねども、われは鶴

氈を着て立つて徘徊すといへり。

されば今ふる雪も、もと見し雪

に變らねども、われは鶴氈を着

て立つて徘徊すといへり。されば

今ふる雪も、もと見し雪に變ら

ねども、われは鶴氈を着て立つ

挿繪 謠本 觀世流。

體にて候ほどに、中々お宿は思ひもよらぬ事にて候。是より十八町あなたに、山本の里とてよき泊の候。日の暮れぬさきに一足もはやく御出で候へ。

ワキ「さてはしかとお貸しあるまじにて候か。

シテ「御痛はしくは存じ候へども、お宿はまゐらせがたう候。ワキ「あら曲もなや、よしなき人を待ち申して候ものかな。退

く

ツレ「あさましや、我等かやうに衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ、後の世の便りともなるべけれ。然るべくは御宿を参らさせ給ひ候へ。

シテ「さやうに思しめさば、何とて以前には承り候はぬぞ。いや此の大雪に遠くは御出で候まじ。某追つつきとめ申

し候べし。

「なうなう、旅人、お宿参らせうなう。餘りの大雪に申す事も聞えぬげに候。痛はしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ、今ふる雪に行き方を失ひ、一所にたゞずみて、袖なる雪を打ち拂ひ打ち拂ひしたまふ氣色。『古歌の心に似たるぞや。駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし』佐野の渡りの雪の夕暮。かやうによみしは大和路や、『三輪が崎なる佐野のわたり、

地
下歌

』是は東路の、佐野のわたりの雪の暮に、迷ひ疲れ給はんより、見苦しく候へど、一夜は泊り給へや。上歌』げに是も旅の宿假初ながら、値遇の縁、一樹の蔭のやどりも、此の世ならぬ契なり。それは雨の木蔭、是は雪の軒ふりて、憂き寝ながらの草枕、夢より霜や結ぶらん。

山本の里 上野國(群馬縣) 群馬郡八幡村邊の舊名。

駒とめて云々 藤原定家の歌。新古今集に見ゆ。
三輪が崎 奈良縣磯城郡。

一樹の蔭の云々 説法明眼論に「一樹の下に居し、一河の流を汲み、一夜同宿、皆これ先世の結縁なり」と。

シテ「いかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ、参らせうずる物もなく候はいかに。
ツレ「折ふしこれに粟の飯の候程に、苦しからずは参らせられ候へ。」

シテ「さらばその由申し候べし。」

「いかに申し候。お宿をば参らせて候へども、何にても参らせうずる物もなく候。折ふしこれに粟の飯のある由申し候。苦しからずはきこし召され候へ。」

ワキ「それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。」

シテ「なう、きこし召されうずると仰せ候。急いで参らせられ候へ。」

ツレ「心得申し候。」

シテ「總じてこの粟と申す物は、いにしへ世にありし時は、歌

により、詩に作りたるをこそ承りて候に、今はこの粟を以て身命を繼ぎ候。げにや盧生が見し榮華の夢は五十年、その邯鄲の假枕、一炊の夢のさめしも粟飯炊ぐ程ぞかし。あはれや、げに我もうちも寝て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、『なう御覽ぜよ、かほどまで』住みうかれたる故郷の、松風寒き夜もすがら、寝られねば夢も見ず。何思ひ出のあるべき。
シテ「夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあてまゐらせ候べきや、思ひ出だしたる事の候。鉢の木を持ちて候。これを切り、火に焚いてあて申し候べし。」

ワキ「げにげに鉢の木の候よ。」

シテ「さん候。それがし世にありし時は、鉢の木に好き、數多木

盧生の夢 開元十九年、道者呂翁、邯鄲ノ邸舎ノ中ニ于テ少年盧生ニ値フ。生自ラ其ノ困ヲ嘆ズ。翁囊中ノ枕ヲ操リ之ニ授ケテ曰ク、此ヲ枕セバ當ニ子ヲシテ榮適意ノ如クナラシムベシト。生寢中ニ于テ進士ニ擧ゲラレ、甲科ニ登リ、大政ヲ掌ルコト十年、趙國公ニ封セラレ、三十餘年中外ニ出入シ、崇盛比無シ。欠伸シテ寤ム。初メ主人黃梁ヲ蒸シテ饌ヲ爲ル。時ニ尙未ダ熟セザルナリ。呂翁笑ツテ謂ヒテ曰ク、人世ノ事亦猶カクノゴトシト。
(異聞録)

を集めもちて候ひしを、かやうの體にまかりなり、いや
いや木好きも無用と存じ、皆人に參らせて候。さりなが
ら、今も梅・櫻・松を持ちて候。あの雪もちたる木にて候。某
が祕藏にて候へども、今夜のおもてなしに、これを火に
焚きあて申さうずるにて候。

ワキ「いやいや、これは思ひもよらぬ事にて候。御志はありが
たう候へども、自然又おこと世に出で給はん時の御慰
にて候間、なかなか思ひもよらず候。

シテ「いや、とても此の身は埋木の、花咲く世にあはんこと、今
この身にてはあひがたし。

ツレ「たゞ徒らなる鉢の木を、御身の爲に焚くならば、

シテ「これぞまことに難行の法の薪とおぼしめせ。

ツレ「しかもこの程雪降りて、

シテ「仙人に仕へし雪山の薪。

ツレ「かくこそあらめ

シテ「われも身を

地「捨人のための鉢の木、切るとてもよしや惜しからじと、

雪うち拂ひて見れば、面白や、いかにせん。まづ冬木より

咲きそむる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木よ

りまづさきだてば、梅を切りやそむべき。見じといふ人

こそ憂けれ、山里の折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜

みしに、今更薪になすべしとかねて思ひきや。

地「櫻を見れば春ごとに花少し遅ければ、此の木や侘ぶる

と心を盡くし育てしに、今はわれのみ侘びて住む、家櫻

切りくべて、緋櫻になすぞ悲しき。

シテ「さて松はさしもげに、

埋木の云々 平家物語に

「埋木の花さくこともな
かりしに身のなるはてぞ
あはれなりける。源頼政
と。」

雪山 印度北境に聳ゆる大
山。釋迦、過去世に、こ
に於て苦行せしといふ。

窓の梅の云々 和漢朗詠集

に「池凍(コホリ)東頭風
度(ワタ)解。窓梅北面雪
封寒。藤原篤茂」と。
見じといふ云々 菅家後集
に「山里の折りかけ垣の
梅の花、いかなる人の見
じといふらむ」と。

地「枝をため、葉をすかして、かゝりあれと植ゑ置きし、その
 かひ今は嵐吹く、松はもとより常磐にて、薪となるは梅・
 櫻、切りくべて今ぞ御垣守、衛士の焚く火はおためなり、
 よくよりてあたり給へや。」
 ワキ「近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候。」
 シテ「御出でにより我等も火にあたりて候。」
 ワキ「いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ぞ、承りたく
 候。」

シテ「いや、某は名字もなき者にて候。」
 ワキ「何と仰せ候とも、唯人とは見え給はず候。自然の時の爲
 にて候。何の苦しう候べき。御名字を承り候べし。」
 シテ「この上は何をかつゝみ候べき。是こそ佐野の源左衛門
 尉常世がなれる果にて候。」

松はもとより云々 原作に
 は「松はもとより煙にて、
 薪となるもことわりや」と
 あるを、徳川時代に、本
 文の如く改作せり。
 御垣守云々 詞花集に「み
 かきもり衛士のたく火の
 夜はもえて晝は消えつゝ、
 ものをこそ思へ。大中臣
 能宣」と。

ワキ「それは何とてかやうの散々の體にはなり給ひて候ぞ。
 シテ「その事にて候。一族どもに横領せられて、かやうの身と
 なりて候。」
 ワキ「なう、それは何とて鎌倉へ御上り候ひて、その御沙汰は
 候はぬぞ。」
 シテ「運の盡くる處は、最明寺殿さへ修行に御出で候上は候。
 かやうにおちぶれては候へども、御覽候へ、是に物の具
 一領、長刀一えだ、又あれに馬をも一匹つないで持ちて
 候。これは、唯今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれ
 たりともこの具足取つて投げかけ、錆びたりとも長刀
 を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参じ、着
 到につき、』さて合戦始らば、
 地「敵大勢ありとても、一番に破つて入り、思ふ敵と寄りあ

最明寺殿 北條時頼。鎌倉
 五代の執権。剃髮して最
 明寺入道といふ。弘長三
 年（五三）歿、年三十七。

ひ、打ちあひて死なん此の身の此のまゝならば、徒に飢に疲れて死なん命なんぼう無念のことぞふぞ。

ワキ

『よしや身の、かくては果てじ、只頼め、われ世の中にあらん程、またこそまゐり候はめ、暇申して出づるなり。』

ツレ

『名残惜しの御事や、はじめはつゝ、む我が宿の、さも見苦しく候へど、しばしは留りたまへや。』

ワキ

『留る名残のまゝならば、さて幾度か雪の日の、』

ツレ

『空牙え寒きこの暮に、』

ワキ

『いづくに宿をかり衣、』

ツレ

『今日ばかりとまりたまへや、』

ワキ

『なごりは宿にとまれども、暇申して、』

ツレ

『御出でか、』

地

『さらばよ、常世。』

(申入)

只頼め云々 新古今集に「なほたのめしめぢが原のさしも草われ世の中にあらむかぎりは。清水観音御歌」と。

ツレ

『またお入り。』

地

『自然鎌倉に御のぼりあらばお尋ねあれ。けうがる法師なり。かひがひしくはなけれども、披露の縁になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふなと言捨てて、出で船のともに名残や惜しむらん。』

後シテ

『いかにあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふはまことか。なに、おびたゞしく上る。さぞあるらん。東八箇國の大名、小名、思ひ思ひの鎌倉入り、さぞ見事にて候らん。白金物打つたる絲毛の具足に、金銀を展べたる太刀、刀、飼ひに飼うたる馬にのり、乗替中間きらびやかに、うち連れうち連れのぼる中に、常世が常にかはりたる、馬物の具や打物の物、そのものにあらざる氣色、』さぞ笑ふら

東八箇國 相模・武蔵・安房・上總・下總・常陸・上野・下野。

ん。さり乍ら、所存は誰にも劣るまじと、心許りは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや。
 地『急げども急げども、弱きに弱き柳の絲の、
 シテ』よれによれたる瘦馬なれば、
 地『うてどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乗り力な
 ければ追ひかけたり。

後ワキ「いかに誰かある。

ヅレ「御前に候。

ワキ「國々の軍勢どもは皆々來りてあるか。

ヅレ「さん候。悉くまゐりて候。

ワキ「その諸軍勢のなかに、いかにもちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者

一騎あるべし。急いでこなたへ來れと申し候へ。

ヅレ「畏つて候。

「いかに誰かある。

狂言「御前に候。

ヅレ「君よりの御諛には、諸軍勢のなかに、ちぎれたる具足を

着、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者あるべし。急いで尋ねて御前へ參れとの御ことに候。

狂言「畏つて候。

「いかに申し候。

シテ「何事にて候ぞ。

狂言「上意にて候。急いで御前へ御參り候へ。

シテ「何と、某に御前へ參れと候や。

狂言「なか／＼の事。
 シテ「あら思ひよらずや。これは定めて人たがへにて候べし。
 狂言「いや／＼、そなたの事にて候。その仔細は、諸軍勢の中に、
 いかにも見苦しき武者をつれて参れとの御事にて候
 が、見申せば、其方ほど見苦しき武者も候はぬ程に、さて
 申し候。急いで御参り候へ。」

シテ「何と、たとへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に
 参れと候や。」

狂言「なか／＼のこと。」

シテ「さては某が事にて候べし。畏つたと御申し候へ。」

狂言「心得申し候。」

シテ「げに／＼、これも心得たり。某が敵人、叛謀人と申し上げ、
 御前へめし出だされ、頭を刎ねられんためな。よし／＼、



〔筆音鞠堀小〕

世 常

それも力なし。いで、御前に参らんと、『大床さして
見渡せば、

地『今度の早打に上り集まる兵つはものきら星の如く竝み居たり。
さて御前には諸侍、その外す數人じん竝み居つゝ、目をひき、指
をさし、笑ひあへるその中に、

シテ『横縫のちぎれたる

地『古腹巻に錆長刀やうゝに横たへ、わるびれたる氣色
もなく、参りて御前にかしこまる。

ワキ「やあ、いかにあれなるは佐野の源左衛門尉常世か。これ
こそいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ。見わすれて
あるか。いで、汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ鎌倉
に御大事あるならば、ちぎれたりともその具足取つて
投げかけ、錆びたりともその長刀を持ち、瘦せたりとも



あの馬に乗り、一番に馳せ参るべきよし申しつる、言葉の末を違へずして、参りたるこそ神妙なれ。まづ、今度の勢づかひ、全く餘の儀にあらず。常世が言葉の末、眞か偽か知らん爲なり。又當参の人々も、訴訟あらば申すべし。理非によつてその沙汰いたすべきところなり。まづまづ沙汰のはじめには、常世が本領佐野の庄、三十餘郷返し與ふるところなり。又なによりも切なりしは、大雪ふつて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火にたきあてし志をば、いつの世にかは忘るべ

挿繪 鉢の木、坂巻耕漁筆。

き。いでその時の鉢の木は梅・櫻・松にてありしよな。その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、あはせて三箇の庄、子々孫々にいたるまで、相違あらざる自筆の狀、『安堵に取り添へたびければ、

シテ『常世はこれを賜はりて、

地『三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ、始め笑ひしともがらも、これほどの御氣色、さぞ羨ましかるらん。さて國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、古里へとてぞ歸りける。

シテ『その中に常世は、

地『よろこびの眉を開きつゝ、今こそ勇め、この馬に打乗りて、上野や佐野の船橋、とりはなれし本領に安堵して歸るぞうれしかりける。

（觀世流謠本）

梅田 加賀國（石川縣）河北郡森本村大字梅田。金澤市の東北六軒。
櫻井 越中國（富山縣）下新川郡三日市町邊の舊名。
松井田 上野國（群馬縣）碓氷郡松井田。

謠曲 謠曲は猿樂の能に伴なふ章曲にして、室町幕府の世、能の發達と共に形成せられたる一大文學なり。而してその能が古來幾多の舞樂を集めて大成せられたると同様、謠の文もまた各種の文學の綜合と見るべきものにして、上古・中古の古典に見ゆる傳説・歌物語等より、近古時代の戦記物に至るまで、凡そ有名なる文章と物語とは、殆ど大部分謠曲の材料に取られたり。かくて謠曲はその流行と共に、江戸時代に入りて、各種の文學に大なる影響を與へたり。

二三 最明寺入道

吉田 兼好

一、相模守時頼の母

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝことありけるに、すゝけたる明障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切りまはしつゝ、張られければ、せうとの城介義景、その日の經營して候ひけるが、賜りて、なにがし男に張らせ候はん。さやうの事に心得たるものに候ふ。」と申されければ、その男尼が細工によもまさり侍ら



吉田兼好 本姓下部氏。洛外吉田に居りし故に吉田と稱す。文才あり、和歌に長ず。正平五年(1110)歿、年六十九。

松下禪尼 北條時氏の室。

挿繪 松下禪尼。

(前賢故實)

城介義景 安達氏。秋田城介。

じ。」とて、なほ一間づつ張られけるを、義景みなを張りかへ候はんは、遙に易く候ふべし。まだらに候ふも見ぐるしくや。」と重ねて申されければ、尼も、後はさはしと張りかへんと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。物は破れたる處ばかりを修理して用ゐる事ぞと、若き人に見習はせて心づけん爲なり。」と申されける、いと有りがたかりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下をたもつ程の人を子にて持たれける、誠にたゞうどにはあらざりけるとぞ。

二、最明寺入道

最明寺入道、鶴岡の社参のついでに、足利左馬入道の許へ、まづ、使をつかはして、立ち入られたりけるに、あるじまうけ

最明寺入道 前課に註す。

鶴岡 鎌倉の八幡宮。
足利左馬入道 源義氏。北條時政の外孫。左馬頭。出家して正義と號す。

せられたりけるやう、一獻にうち鮑、二獻に蝦、三獻に搔いも
ちひにて止みぬ。その座には、亭主夫婦、隆辨僧正、あるじ方の



三、平、宣時朝臣

平、宣時朝臣、老の後、昔がたりに、最明寺、入道、ある宵の間に

人にて座せられけり。さて、年毎に
たまはる足利の染物、こゝろもと
なく候ふと申されければ、用意し
候ふとて、いろ／＼の染物三十、前
にて、女房どもに、小袖に調ぜさせ
て、のちに遣されけり。その時、見た
る人の、近くまでありしが語り侍
りしなり。

隆辨 龜岡八幡の別當。權
僧正。

挿繪 時頼木像。

宣時 北條氏。家々大佛と
號す。

呼ばるることありしに、『やがて』と申しながら、直垂の無く
て、とかくせし程に、復、使きたりて、『直垂などのさぶらはぬに
や。夜なればことやうなりとも、とく。』とありしかば、萎えたる
直垂、うち／＼のまゝにてまかりたりしに、銚子に、かはらけ
取り添へて、もて出でて、『この酒を、獨たうべむがさう／＼し
ければ、申しつるなり。肴こそなけれ。人はしづまりぬらむ。さ
りぬべき物やあると、いづくまでも求め給へ。』とありしかば、
紙燭さして、くま／＼を求めし程に、臺所の棚に、小がはらけ
に、味噌の、少し附きたるを見出でて、『これぞ求め得て候ふ。』
と申ししかば、『事足りなむ。』とて、快く、數獻に及びて、興に入
られ侍りき。その世には、かくこそ侍りしか。』と申されき。

（徒然草）

徒然草 二卷。兼好法師の
隨筆。

二四 東郷司令長官上奏文

客歲二月上旬聯合艦隊が大命を奉じて出征したる以來、茲に一年有半、其の間に海陸の交戦皇軍勝利を獲ざることなく、今日復び和平の秋に遇ひ、臣等、犬馬の勞を了へて、大轟の下に凱旋するを得たり。是れ一に、大元帥陛下御威徳の然らしむるものにして、臣等の終始感激措く能はざる所なり。初め聯合艦隊の海上に第一期作戦を開始するや、臣は大命に基き海陸の形勢と陸戦の方向を考察し、敵艦隊の主力を旅順方面に拘束し、之をして浦鹽の要地に據らしめざるを以て戦略の主旨とし、先づ旅順、仁川に敵を迅撃し、更に數次を重ね以て漸時に其の勢力を滅殺し、又屢冒險なる敵港の閉塞及び敵前の水雷沈置等を試み、以て敵の出動範圍を

客歲 明治三十七年。

大元帥陛下 明治天皇。

縮少するに力め、尙麾下艦隊の一部を常に朝鮮海峽に駐めて、海上の要害を扼し、以て浦鹽の敵を監視すると同時に、旅順の敵に對する第二戦線たらしめたり。此作戦の前期中敵は終始地利に據りて退嬰を事とし、我が軍連續の攻撃も容易に其の成果を收むる能はざりしが、八月中旬敵艦隊主力の旅順より浦鹽に逃れんとするに及びて、黄海及び蔚山沖の海戦を見るに至り、期せずして全く敵の戦略企圖を摧破し、我が作戦目的の過半を達成するを得たり。其の後陸戦漸く歩武を進め、旅順の背面に對する我が攻圍軍不撓の追撃は海上に於ける耐久の封鎖と相須て、遂に敵艦隊の主力を其の要塞の下に殲滅するに至れり。惟ふに此の期の作戦は戦勢の自然に伴ひて、漸進微功を積み、攻戦約十ヶ月に亙り、我が將卒の心力を傾注し、智勇を發揮したること本戦役中

に冠絶し、忠死の士、殉難の艦亦少なからざりしと雖も、戦局の大勢は茲に初めて定り、爾後日本海に於ける決勝の機運も此の間に萌芽したるを覺ゆ。

今年改ると共に、第二期の作戦に移り、我が艦隊は更に兵力を整頓して敵の第二艦隊へ備へ、傍ら露領沿海州を包鎖して敵國軍資の輸入を遮断し、時に支隊を南洋に分遣して敵の航通を威嚇するに勉め、其の間對馬・津輕・宗谷・國後等の諸水道附近に於て捕獲したる船舶三十餘隻を算す。初夏五月に入り、敵の第二艦隊近海に出現するに及びて、豫め我が全力を朝鮮海峡に集中し、逸を以て勞に乗ずるの策を執りしが、我が將卒の勇敢なる動作は神明の加護に由り著々其の功を奏し、日本海海戦の一舉敵影を海上より掃蕩し以て此の期の作戦を終結するを得たり。爾來海洋は名實共に

我が艦隊の制壓に歸し、作戦第三期に入りしも負擔の任務は輕減し、或は陸軍と與に樺太の攻略に従事し、殆ど一兵を損せずして協同の任務を果し、或は時々北韓方面に作動して敵を脅威し、且依然露領の包鎖を續行して、休戦復和の終局に至る迄確實に之を維持せり。

之を要するに、聯合艦隊の作戦は、其の第一期に於て戦勢を定め、第二期に移りて戦勝を決し、第三期に入りて戦果を收めんとしたるものにして、其の間緩急難易の差異ありと雖も、全局に互る一貫の攻戦は、其の始より順當に經過し終に今日あるを見るに到れり。今や凱旋して東京灣に集合せる帝國艦船大小百七十餘隻、固より戦役に亡失したるものありと雖も更に戦利として獲得したるものを加へ、尙能く戦前に劣らざる武力を保有するを得たるは、臣等の誠に光

榮とする所なり。終に臨み臣は、聯合艦隊が滿韓に於ける陸戦の效果に依り其の餘利を蒙りたること少なからず、又海軍大小諸機關の整備活動其の他諸官衙の支助協力に依り、海上の作戦遺憾無く進捗したることを感喜す。茲に謹んで、海上作戦の経過を奉告し大命に對する責務の結了を奏聞す。

〔東郷聯合艦隊司令長官上奏文〕

國風 三首

(東郷平八郎)

日の本の海にとゞろくかちどきは御稜威かしこむ聲とこそ知れ (日本海海戦後言志)

天津日もけふの御典をことほぎて千代萬代にひかりかがやく (昭和三年十一月、於京都)

おろかなる心につくす誠をばみそなはしませ天つちの神 (逃懷)

二五 文學と氣品

芳賀 矢一

文學といふものは、人間界の飾であり、國家の誇であつて、個人から見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は、その國の品格も一段と高く見え、文學の嗜みのある偉人は、一入懐かしい心持がする。魏の曹操はその事功の上から見ては、餘り好かれぬ人物であるが、槩を横たへて、「月明かに星稀に。」と歌つた一事を思ひ出すと、何となく慕はしくなつて來る。

源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるのは、勿來關に馬を停めて、「道もせに散る山櫻かな。」と詠んだ風流、衣川に矢を番つて、衣のたてはほころびにけり。」と呼び止めた情致がある爲で、これはその後の爲義にも、爲朝に

芳賀矢一 福井市の人。國文學者。文學博士。東京帝國大學名譽教授。國學院大學々長。昭和二年歿、年六十一。

曹操 字は孟德。勢を得て魏の國王となり、武帝と稱す。後漢の獻帝の建安二十五年(西紀二二〇)歿年六十六。

月明らかに云々 曹操の短歌行に、「月明かに星稀、烏鵲南飛」とあり。

も、義朝、義平にも眞似の出来ぬところ。源三位頼政の「しひを拾ひて世を渡るかな。」は餘り感心せぬが、「弓張月のいるに任せて。」埋木の花さくこともなかりしに。」などの韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは、かりの契をいかで結ばん。」の歌と、梓弓なき數にいる。」の辭世である。平忠盛に「波ばかりこそよると見えしか。」の風流があつて、眇の俄殿上人も、優にやさしい感じを與へる。これは淨海入道の及ぶところではない。頼朝の「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ。」を思へば、義經や範頼を殺すほどの人とは思はれぬ。西行法師との談話にも、幾分の風流譚が交つてゐたらうと想像せられる。

その子實朝に至つては、更に歌の名手。これは源氏の武將中の第一で、曩祖八幡太郎の文學的方面は、こゝに最大な發

達を遂げてゐる。頼朝の覇業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽である。文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で風流譚のあるのは、非常にその人品を高くするもので、時にはその人の缺點まで掩ふやうな心持がする。

實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾るものは薩摩守忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落ちに馬を乗り返して、俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗しい永久の語り草である。

武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜みがなくてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事柄である。武田氏・北條氏・長曾我部氏等の家訓は皆これを歌つてゐる。それであるから、戰國時代にも風流の心得のある武

しひを拾ひて云々

登るべきたよりなき身は木の下に、しひを拾ひて世を渡るかな。

弓張月云々

ほととぎす名をも雲井にあぐるかな弓張月のいるにまかせて。

埋木の云々

埋木の花さくこともなかりしに、みのなる果ぞあはれなりける。

かりの契云々

とても世にながらふべくもあらぬ身の、かりのちぎりないかで結ばん。

梓弓云々

かへらじとかれて思へば梓弓なき數にいる名をぞとむる。

波ばかり云々

有明の月もあかしの浦風に波ばかりこそよると見えしか。

淨海入道 平清盛のこと。

陸奥の云々

みちのくのいはでしのぶはえぞしらぬ書きつくしてよつばの石ぶみ。

都落ち 壽永二年(八四三)七月、源義仲に京師に通ら

れて、平家一門は、安徳天皇を奉じて西奔せり。

人が随分多かつた。承久の役に院宣を讀みうる人がなかつたなどといふのは、ほんたうの武士のなかつた證據。北條氏康・毛利元就・太田道灌などは皆和歌風流の嗜みが深かつた。豊臣秀吉を無風流な人と思ふのは大間違ひ。吉野の花見には諸大名もそれ〴〵詠歌をもものしてゐる。上杉謙信が「霜滿軍營」の一吟は、人をしてまづこれに同情せしめる所以で、その襟度の遙に武田信玄以上だと思はしめる最大原因である。その家來の直江兼續も、文學の素養からその風采を想望せしめる。

多くの傳説を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは、何となく物足らない心地がする。

梶原景時、明智光秀の時にとつての連歌などが、稍その憎

しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。

幕末の志士は必ず何物かを口吟んでゐる。藤田東湖の回天詩や正氣歌などはその尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病牀兒叫飢」、橋本景岳の「始知松柏後凋心」、賴三樹三郎の「誰題日本古狂生」をはじめ、佐久間象山でも、吉田松陰でも、僧月照でも、伴林光平でも、乃至は望東尼でも、或は詩に、或は歌に、その心事は永くその文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられないやうになつてゐる。これ等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人。その志を繼いだ人々が、却つて明治の世には公となり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩、一首の和歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古人の情緒を動かすであらう。

文學は廣い意味でいへば固より和歌のみに限らぬ。しか

吉野の花見 文祿三年(三酉)二月二十五日、秀吉は、秀次・家康・前田利家等と吉野山に赴いて花見を行ふ。

霜滿軍營云々 謙信の九月十三日の詩に「霜滿軍營、秋氣清。數行過雁月三更。越山併得能州景。遮莫(サモアラバアレ)家郷憶(遠征)しと。

直江兼續 越後の人。山城守と稱す。謙信の近臣。後、家康に屬し、米澤に封ぜらる。元和五年(三三九)歿、年六十。

藤田東湖 名は彪。水戸藩士。安政二年(三五五)歿、年五十。

梅田雲濱 名は源次郎。若狭の人。尊王攘夷論者。安政六年(三五七)獄死、年四十四。

橋本景岳 名は綱紀、通稱左内。越前の人。幕末の志士。安政六年斬らる。年二十六。

賴三樹三郎 名は醇。山陽の第三子。安政六年斬らる。年三十五。

佐久間象山 名は啓。信濃松代の藩士。元治元年(三五四)攘夷黨の爲に京都に刺さる。年五十四。

吉田松陰 名は寅次郎。長州萩の藩士。安政六年斬らる。年二十九。

月照 京都清水寺の僧。安政五年薩摩湯に入水。年四十六。

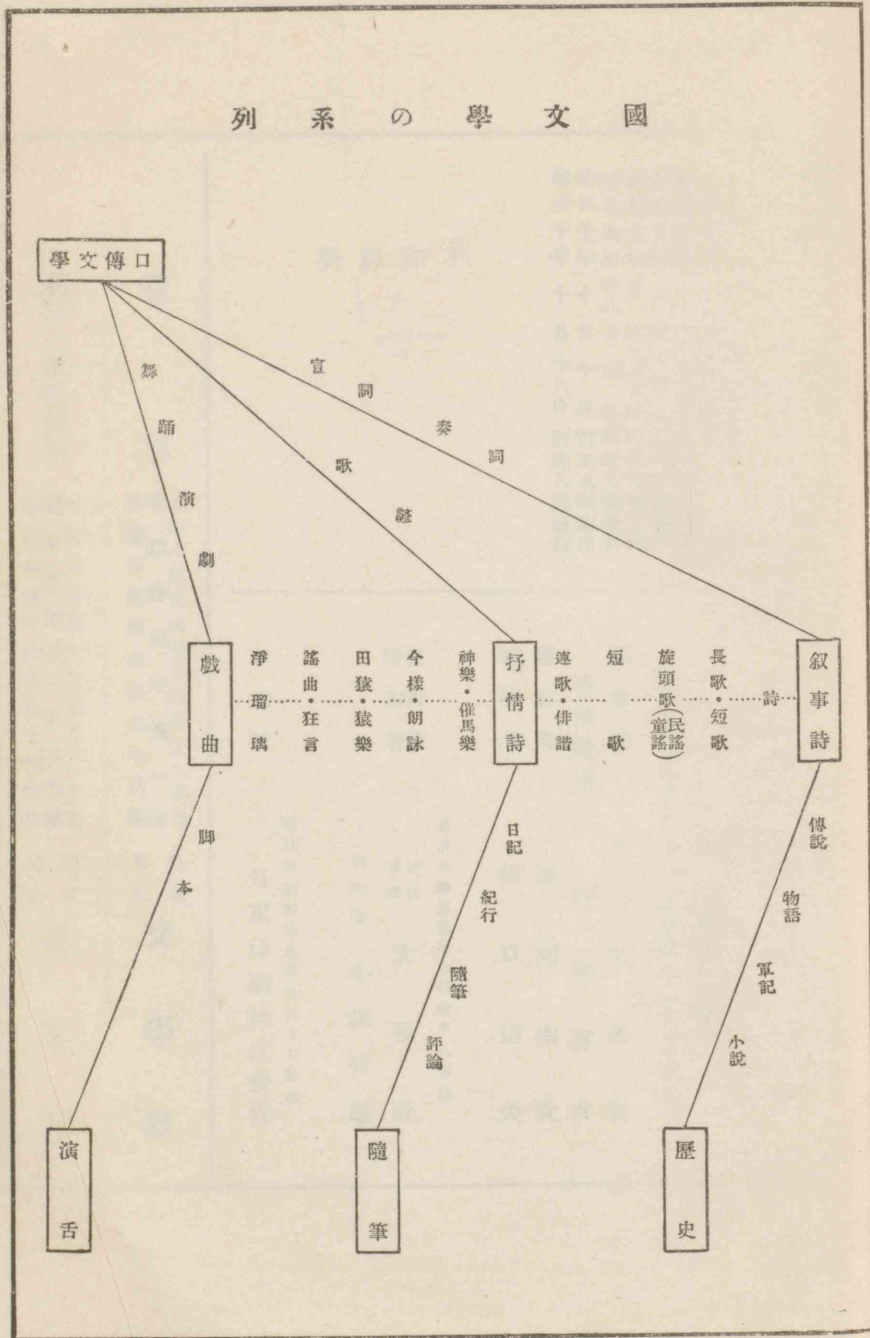
伴林光平 攝津の人。幕末の志士。元治元年(三三四)

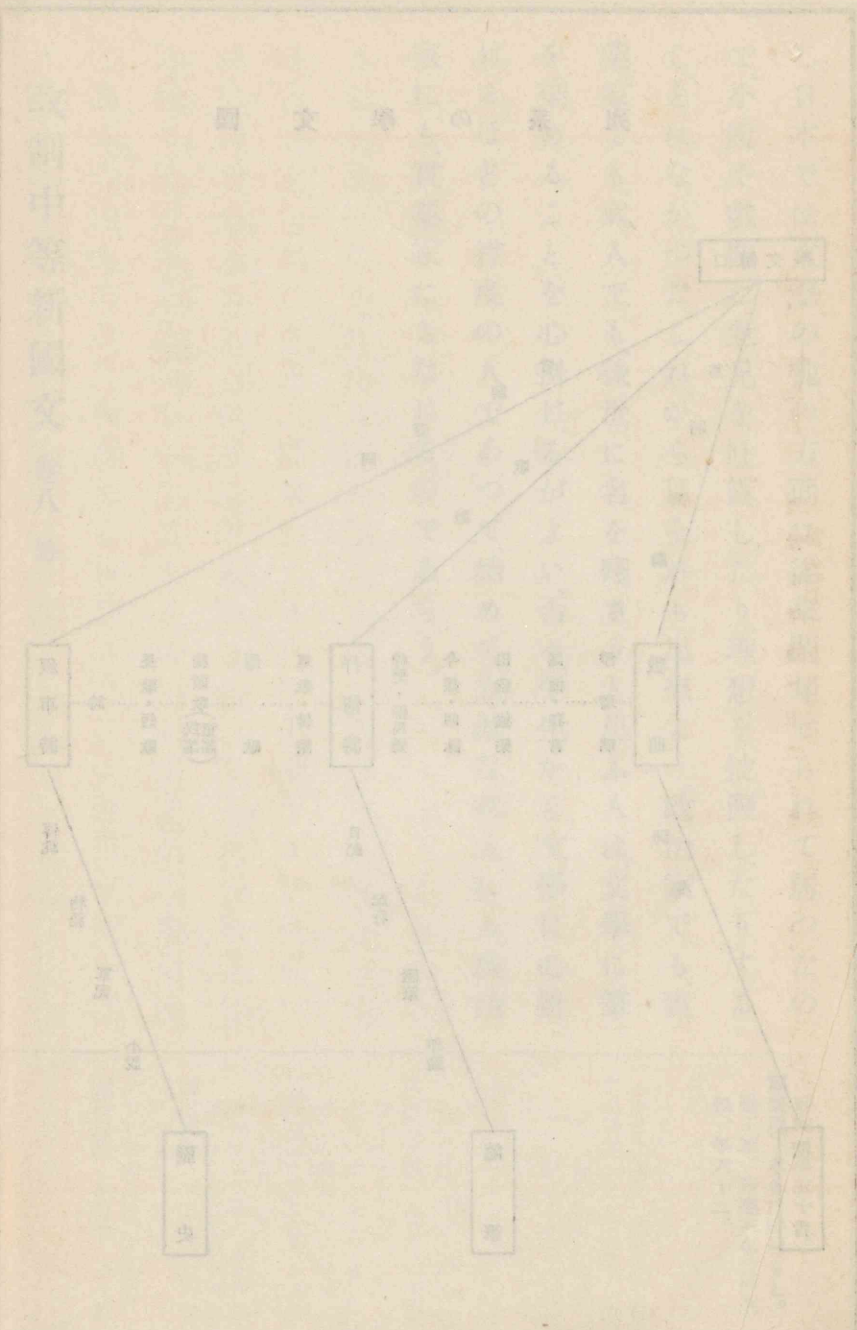
し日本では文學の他の方面は從來閑却せられて居つたので、小説や戯曲に意見を吐露したり、理想を披瀝したりすることはなかつた。これからはそれも出來よう。政治家でも、實業家でも、武人でも、後世に名を残さうと思ふ人は、文學に筆を染めることを心掛けるがよい。否々、平生から文學に心掛けるほどの襟度の人であつて、始めて立派な武人にも、政治家にも、實業家にもなれるのであらう。

改制中等新國文卷八終

刑死、年五十二。
望東尼 本名は野村もと。
勤王家。慶應三年(五七)
歿、年六十二。

國文學の系列





大正十年十一月廿一日發行
 昭和四年十二月廿四日發行
 昭和四年十二月廿四日發行
 昭和九年十二月廿四日發行
 昭和九年十二月廿四日發行
 昭和十年十二月廿四日發行



改制中等新國文 全十冊
 定價各冊 金五十八錢

編纂者 故三矢重松
 右相續者 三矢夏井
 補訂者 鳥野幸次
 補訂者 折口信夫

發行者 株式會社 文學社
 印刷所 日東印刷株式會社

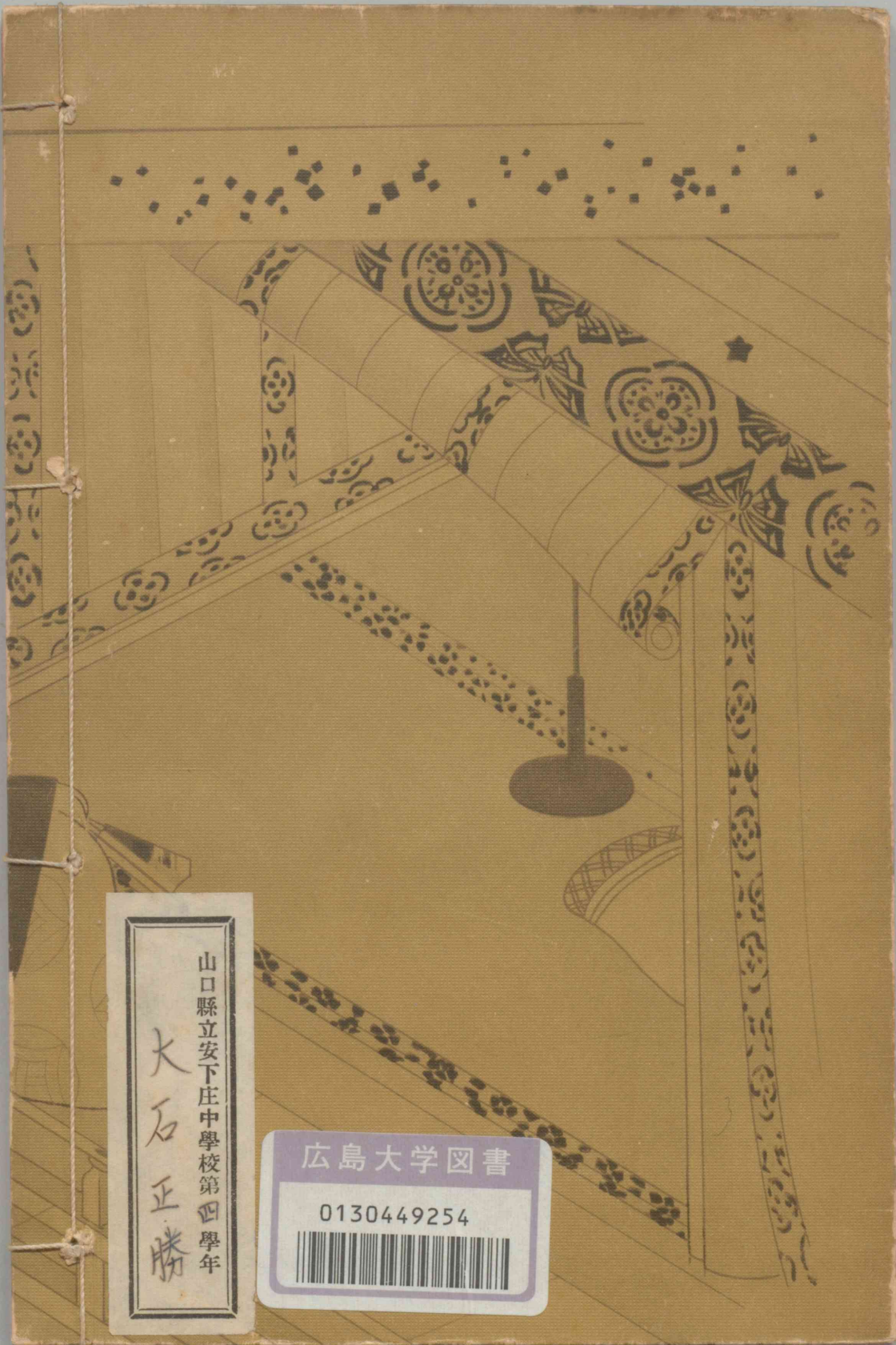
東京市神田區美土代町十八番地
 東京市本郷區瓦砂町三十六番地

發兌

東京市神田區美土代町十八番地 株式會社 文學社
 電話 振替口座東京三八七八番

大阪市西區靱北通り二丁目 株式會社 盛文館
 電話 振替貯金口座大阪七四三番

關西一手販賣所



山口縣立安下庄中學校第四學年
大石正勝

広島大学図書
0130449254


漲シタガヒ

國語

題目

頁

漢字及語

全上假名遣

解

釋

挑トモげ(かきあげ)燈トモをトモ照トモす

なんとなく光かレめつてゐるのん

心ココロ (心かすみわたるものであるよ)

梅ウメの香カがしめりをくくんで夜ヨ深コにコ面オモん

香カら花ハナに百ヒャク愛アイし(花ハナのハナためにはつらり)

かほりえうヤな(雨アメ)かこつ(愚オロチ痴チを云ふ)

趣オモシロシはあることだ。時得トキトク顔オモ(おれがオレなくなく

古得コトク意イえうウ左サ履リ付ツで)すなく(あつまる)

せかし(面白オモシロシ)初音ハツネはハツどうドウたろうと心待ココロマち

にまニつてゐる頃トキ村雨ムラアメ(しきつが降りまマぎギ雨アメ)

降フり暮クして(百中朝ヒャクチュウかカる晩バンまで降フる)

書物シヤモノをくりかへしくシク讀ユクんでゐると

心地ココロぞゾある(心持ココロモチがする)

涼スズシしい感カンぢがチする

大きオホキやヤかカなる(大オホきキのノ様サマ子コをシてシてテ大オホつツらラの

まマどドをシてシてテ間マはハ長ナガいイ時トキ間マをシてテ

外山 (の字)

題目

頁

漢字及語句 全上假名遣

解

釋

外山 (月を見て感ずるより) もノ屬身にしみて観
 深く思はれる。(竹見カケヒ) 懸心ヲ極(地上にかけ渡る)
 埋み極 哀水深くを(赤水) 同のてつて降るしこと
 に降る雨 さいて (さいし) 極 (秋のすへん秋のさ
 鳴) き變したる (あまり) ちきつきて声かたへぐ
 に右つてある虫) (ち) 持取被 (鳴) きちかろ近寄
 けり ~~けり~~ けり ~~けり~~ 沈木めらん (も) ちたまるてあらう
 けり ~~けり~~ けり ~~けり~~ 物におする感じは人になつ
 てさまぐんちか ~~物~~ もものたん。湿る (しん) かりとし
 ものかろ (もの) のけりれども)